

始



建文館編輯所編纂

國定教科書に基き系統的に編纂せる

中學校  
高等女學校  
實業學校

入學受験準備書



東京

建文館藏版



緒言

今日、中學校高等女學校其他各種の實業學校入學準備書と題して販賣せるもの數種に止まらずに雖も、之を精細に調ぶるときは、何れも皆問題集の如き感なしとせず、その多くは説明等に親切を缺きて、眞に準備の自習用に適するもの稀なり。著者之を慨し、専ら應試者のために適切にして親切に、且系統的なる自習用書を編纂せんものをご志し、左の三大綱、

1. 國語の讀方・解釋・意義・假名文字等の正確、
2. 普通文及び書簡文を綴ることの方法とその熟達、
3. 算術を秩序的に學習し得ること、

につきて、十分の注意を拂ひて脱稿したるもの即ち本書なり。依つて國定教科書に基き系統的に編纂せる入學受験準備書と題す。本書もし前途有望なる生徒諸君のために幾分の裨益するところあつば著者の幸甚とするところなり。

大正元年八月三十一日

編者 しるす

緒言



## 受験者心得

### 一、受験に關する一般の心得

1. 試験当日には受験用具を忘れぬ様にせよ。
2. 試験当日には必ず始まる時刻より二十分か三十分前に試験場につく様にし、十分に氣を落付けよ。
3. 時間に遅れると、學校によりては受験を許さぬこともあるから、必ず遅刻せぬ様にせよ。若し、時間いつばいにつく様なことがあつても決してあわてるな。
4. 何種の問題でも、よく問題を熟讀して其の題意をまちがへぬ様にせよ。
5. 何科によらず、入學試験は豫定時間中にすべきものであるから、一問題にあまり多くの時間を費さぬ様にせよ。
6. 何科の問題でも熟讀したる上、番號の順序によらずに、便宜容易きものより答案を認めよ。併し此の場合には問題番號をまちがへぬ様にすることを忘れるな。
7. 答案は自分の覺書にするものでないから、必ず、ていねいに書き、樂書などは決してしてはならぬ。

8. 亂雑な答案は試験官に見てもらへぬことがあるから、必ず、ていねいに書け。
9. 何科の答案でも出来た上、時間があまつたら、再三再四閱讀せよ。
10. 答案には自分の氏名と番號とを書くことを忘れるな。尤も學校によりては、氏名を書かずに番號だけ書くと注意せられてあることもある。その時はその様にせよ。

## 二、國語科(讀方科)受験心得

1. 讀方の假名をつける際に、發音や假名遣を誤らぬ様に注意せよ。
2. 語句及び文章全體によく注意して、意義を取りちがへぬ様にせよ。
3. 句讀點によく注意せよ。
4. 熟語の解釋は只一字一字の解釋では不十分であるから、熟語としての意義を明瞭に解釋せよ。
5. 解釋は方言を使はず、必ず、普通語を用ひよ。
6. 意義を解釋するには只文字をたごつて言葉を言ひかへただけでは不十分であるから、其の文章に含まれてゐる眞の意義のわかる様に説明せよ。
7. 文章の解釋には常に時の關係即ち過去、現在、未來及び打消等の語法に注意せよ。

8. 書取の際は同音異義の字を無意義に使用せざる様によく注意せよ。
9. 平假名と片假名とをごたませにし、又はきたなき書きざまをせぬ様に注意せよ。
10. 答案は常に明瞭に認め、時間にあまりがあつたら、必ず、再三閱讀して後に差出せ。

## 三、綴方科受験心得

1. 文題の意味を取違へぬ様にせよ。
2. 文題の意味をよく考へて、文の組立くみだてに氣をつけ、書くべきことを十分に考へた後、筆をとつて綴れ。
3. 文牒(文語文、口語文及び書簡文)を混用せぬやうに注意せよ。
4. 綴方に於ても亦平假名と片假名とをごたませにせぬ様に注意せよ。
5. 綴方は文字を正確奇麗に書くことが特に大切である。これは、如何に文章がうまくても、亂雑な答案は試験官に讀んでもらへぬことがあるからである。
6. 時間にあまりがあつたら十分に推敲せよ。

## 四、算術科受験心得

1. 算術科はいふまでもなく論理の學科で大に思考を要し、其の答案は適確明瞭でな

ければならぬから、前に掲げた、受験に關する一般の心得をかたく守れ、

2. 答は問題の要求してゐるもの(只の數或は名數の何いくら)を漢字で問題番號の下に極明瞭に記せ。其の他式及び運算もわかり易く書け。

3. 算術の答案は各問題を、特に見分け易き様に、問題と問題との間を相當にあけて記せ。

4. 計算をしたら、概算によりて、大躰誤りがないかよく檢べよ。時間があまつたら更に檢算をし、尙時間があつたら方法を異にして計算してみよ。

以上

中等學校  
高等女學校  
實業學校

### 系統的入學受験準備書目次

## 國語ノ部

### 第一編 讀方科

- 第一課 ヨリ讀方、解釋、譯文、書キ……………自一至七〇
- 第三十八課ニ至ル取、音訓等ノ課題……………七一
- 第三十九課 教育勅語……………七二
- 第四十課 戊申詔書……………七二

### 第二編 綴方科

- 第一章 口語と文語との對照……………七四
- 第一節 普通文……………七四
- 第二節 書簡文……………九〇
- 第三節 練習……………九五
- 第一課 普通文……………九五
- 第二課 書簡文……………九九

第二章 普通文	101
第一節 普通文の種類	101
第二節 普通文の組立法	102
第三節 普通文の作例	104
第三章 書簡文	112
第一節 總説	112
第二節 書簡文の形式	113
第三節 書簡文の用語	115
第四節 書簡文の種類及作例	119
第三編 第一編讀方科第一課ヨリ第四十課ニ至ルマデノ答解	自一四八至二三四
◎附録	二二五
今上天皇陛下御踐祚ノ勅語	二二五

### 算術ノ部

算術科ノ目次ハ左方算術科ノ卷首ニアゲタリ

### 系統的入學準備書目次終

中等學校  
高等女學校  
實業學校

## 系統的入學受験準備書

建文館編輯所編纂

### 國語ノ部

#### 第一編 讀方科

##### 第一課

一、左の語に讀み假名を附けよ。

- 蠶卵紙、繪、勸工場、甲板、
- 鶴、駝鳥、鍋、爆發、
- 釘、麻

二、次の文句を解釋せよ。なほ——の所は、讀方をも書け。

1. 天顏殊にうるはしかりき。
2. ばんじやくの重きも遂にうつすべし。

蠶卵紙、繪、勸工場、甲板、  
鶴、駝鳥、鍋、爆發、  
釘、麻

うるはし



たぐひ

涼シノナリ ソノアラズ  
達土ノ下 羊ナリ

路大路、小  
道道、街、天  
途途、中、途次

煙煙

3. 其式の盛なること、前古たぐひなかりき。

4. にごりにしまぬ白蓮の巻葉をもるゝつゆ涼し。

5. この地は四通八達の要路にあたる。

三、左の語を解釋せよ。

うらゝかなる天氣。 神々しさ。 いそしむ。

たどり行く路。 馬ぞろへ。 ひるむ。

手足なゆ。 松の色はゆ。 あがむ。

かしこくもかたじけなし。

四、左の文字の音訓を書け。

待	煙	通	答	殘	聞	藥	報	招
	賴		授	寫	祭	使	降	

第二課

一、左の語の讀方と解釋とを記せ。

神苑、 戦利品、 一心不亂、 看病、

出帆、 配達、 神樂、 退却、

全滅、 親密、

二、左の語を漢字にて書け。

テウセン。(もとの韓) シヤシン。サタウ。(食物とする)

イネカリ。レンベイシヤウ、 ユン色。

アサギ色。センリヤウ。(土地などを) テイシヤバ。

セツケン。(のけんやく)

三、左の御製をつゝしみて解せよ。

とこしへに民安かれといのるなる、

我が世を守れ、伊勢の大神。

四、左の語を解せよ。

亂亂

密、蜜

苦、若

鳥、鳥  
カウモリ

1. ユダン大敵。
2. 人ノフリ見テワガフリ直セ。
3. 猿モ木カラ落チル。
4. 急ガバマハレ。
5. 我が身ヲツメツテ、人ノイタサヲ知レ。
6. 樂ハ苦ノ種、苦ハ樂ノ種。
7. ユロバヌ先ノ杖。
8. 塵モ積レバ山トナル。
9. 病ハ口ヨリ入ル。
10. 鳥ナキ里ノカウモリ。
11. 井ノ中ノ蛙大海ヲ知ラズ。

第三課

一、左の語の讀方をつけよ。

蝦ルヌニアラ  
木、大コ又ナリ

- 草薙劍、 天叢雲劍、 簸川、 蝦夷、
- 三種の神器、 太刀、 福壽草、 八岐の大蛇、
- 鎌、

二、次の文を解釋し、且——を附したる語には、讀方をもつけよ。

由、田  
勝刀カナリ  
服コ又ニアラ  
又アナリ

1. いでや、此劍の由來をかたらん。
  2. 諸川の合流するあたりには、名勝の地少からず。
  3. 我國は國民皆兵なり、男子は何れも兵役に服する義務あり。
  4. 騎兵は進退敏活にして、多くは友軍の前方に出て、敵狀をさぐる。
  5. その任務に輕重の別あることなし。
- 三、次の語の讀方をつけ、且解釋せよ。

酒槽、降參、討滅、到著、運輸  
 將校、貫流、職務、攻撃、日參

四、次の假名にてかける語を漢字にてかけ。

むすめ(女の子のこと) たいち(うち平げること) をば。  
 ちうもん。 さんねん。 はち。  
 あさがほ。 ぎうにう。 しんせつ。  
 とりはなす。

第四課

一、左の語の讀方と、意義をとふ。

技、與、枝、與、與  
 餘興、兵糧、技術、彈藥、功勞  
 行幸、行啓、花々しき戦争、無賴

二、左の文中——を附せる語には讀方をかき、且全文を解釋せよ。

列、烈、裂

總辨、總辨、辯

コノエ

1. 木石の配合おもむき多し。

2. 遊就館には内外古今の武器を陳列せり。

3. 五月五日に男子の福運を祈ること、我が國古來の風習なりき。

4. 境内には櫻最多く、春の盛りには花の雲たなびきて、

「花は櫻木人は武士」の諺を自ら思ひ出でらる。

三、次の語の讀方をとふ。

瓣、揃フ、總、勅使、臨時、  
 鳥居、蓼、敬禮、重要、青銅

四、次の語を漢字にてかけ。

シヤウユ(食用にするもの) テフ(虫の名) シマモノ(織物の名)  
 キイト(かひこのいと) ツウウン(はこぶこと) トウダイ(海をてらすもの)  
 ユノエシダン。 ハウヘイリヨダン。

レンタイキ。

第五課

一、次の文を解釋し、——のある語には讀方をもかけ。

1. 國事にたふれたる人々をあはれみ給ふことの深く  
且あつきを見るもの、誰かは義勇奉公の心を起さざらん。

2. 關所は日暮より後は一切旅人の通行を差止めたれば、  
旅客の宿泊するもの多くほとりには賑やかなる市街ありき。

3. 箱根七湯は開け行く御代と共に、益榮えて浴客年々  
その數を加ふ。

4. 過ぎたるは尙及ばざるが如し。

二、次の語の讀方を附し、且解釋せよ。

誰かは……

暮、墓  
切吐ニアラズ  
七ナリ

尙マダソノ上  
猶マダヤハリ

帥、師

商台ナリ  
古ニアラズ

警、驚

大元帥

輜重兵

拜殿

御製

明治維新

隊商

宿場

旅程

警戒色

保護色

三、次の文字の音と訓とをとふ。

即、器

改、劍

盛

孫、勸

勢、樂

城

送、境

滅、冷

緑

四、次の語を漢字にて書取れ。

シヨウキキクワン。

シンブンシのカウユク。

カウカイ中のキセン。

モクテキをタツス。

二百米突キヤウソウ。

キフカウレツシヤに乗る。

シヤウバツ。

タフレたる家。

第六課

脚足

一、次の語の讀方を附けよ。

敷、街道、泊る、噴火山、徽章、

駱駝、足跡、砂煙、敬白、經木、

二、次の語の講讀をなせ。

發明、發見、應用、不成功、

故障、大名、運轉、肩車、

損、招

損害、恩賜、

三、次の語を漢字にて書取れ。

ゼンクワイ、セリ、

ニモツ、ホゴ、

リヨカウ、(たびの)

ノウフ、(田畑をた)

アンラク、(がやす人)

シンク、

瀧、瀑布

四、次の文の講讀、但し——の所は讀方をも記せ。

1. 水のしづくも度重なれば石をもうがつといふ、まして幾萬年の久しき間此大なる湖水より流れ落ちたる水の力ははかり知るべからず。

2. 山をけつり谷をうがちかゝりては瀧となりよどみては淵となる。

3. 昔を知れる人若し舊道の今のさびしさと昔の賑しさとをくらべ見ば、世の轉變の如何に甚しきに驚くならん。

第七課

一、次の語の讀方及意義をとふ。

附、付

附着、暗黒色、突出、不潔、

悪臭、流通、周圍、發足、

名狀 美觀

二、次の語の讀方をとふ。

- 都會、障子、揚葉蝶、蜂
- 枯葉、烏帽子、不足、胃
- 蠶、印度

胃、胃

三、次の文中——の所は讀方をかき、且全文の解釋をなせ。

- 互に心もとなく思ひ合ひし父子の、今無事にて相見し喜は如何なりしぞ。
- 身體の勞を直すは、よく眠るに如くはなし。
- 飲食に注意し身體の清潔を保ち、適度の運動を怠らず、早く寝ね早く起き、新しき空氣をすひ常に日光に浴して、なほ病にかゝらば是我が罪にあらず。
- 叛服常ならず。

眠 永眠  
 睡 熟睡、午睡  
 寝 寢具、寢蓆

四、次の語を漢字にて書取れ。

- タバコ、シンミツ、イシヤ(病氣をなほす人)
- サウダン、サンボ、ミマヒ
- ユウエン(人々の遊びに行くところ)、タウナヤク(つと)、ハイタツ(くばる)

第八課

一、次の文字の音訓を記せ。

- 願、運、輕、最、變、終、宿
- 程、増、落、餘、關、恥、初
- 橋

二、次の語の講讀をなせ。

- 供給、玉水の音、連日の大雨
- 死傷者、堤防、減退、保存
- 普通、交換、飛散

玉、玉、主  
防、妨

三、次の語の讀方をとふ。

節ノナリ ニアラズ

扇

胸

節穴

帆

唐箕

鼓ノ 鼓

五月雨

太鼓

清涼殿

貯金臺紙

蓄、畜

貯蓄

四、次の語を漢字にて書取れ。

ダイドコロ。

ユキフ(息を)

シヅカ。

パウフウウ。

クモル。

シヨウナ。

シンバイ。

ギム。

ケイバ。

シヨウリ(カツ)

第九課

一、次の文句の解釋をなし、――の所に讀方を附せ。

1. 恩威ならび行はれて、向ふ所敵なく、さしもに強かりし蝦夷も、遂に全く皇威に服するに至れり。

目眼

感にたへず  
交通たえず

二、次の語を漢字にて書取れ。

ギヨフ(とる人)

クワヘイ(しおあ)

ヘンドウ。

トクワイ。

トリアツカヒ。

イウラン(見あ)

ヒヨウ(いり)

シガイ(町の)

カガミ(物をう)

クサル。

三、次の文字の音訓をとふ。

攻

飲

給

吸

叛

去年今夜侍  
清涼秋思  
詩篇獨斷腸  
恩賜御衣今

勞、散、裏、附、暗、  
快、往、注、住、倒、  
廣、告、惡、由、更、

奠、守護、鳴子、唐木、  
祝詞、

第十課

一、左の語句及詩歌を解釋せよ、但——の所は讀方をつけよ。

1. 東風吹かばにほひおこせよ、梅の花、

主なしとて春を忘るな。

2. 五風十雨。

3. 去年の今夜清涼に侍す、秋思の詩篇ひとりはらわた  
をたつ、恩賜の御衣なほこゝにあり、さゝげ持ちて毎

在、此、捧、持、  
每、日、拜、餘、  
香、

異、同、  
多、少、  
緩、急、

始、年、始、  
初、終、始、  
最、初、等、  
初、學、

日餘香を拜す。

二、次の語の講讀をなせ。

異同、 信任、 財産、 支配、  
廟、 敏活、 配合、 沙漠、  
健全、 相談、

三、左の文を解釋し、——の所は讀方をも記せ。

1. 岩にくだくる清流、雪と散り玉と飛ぶ、其上にかゝれる朱塗の橋、美觀先づ目を驚かす、是即ち有名なる神橋にして、日光の結構こゝに始まる。

2. 金銀の光、丹青の色、目もまばゆきばかりなり。

3. 天然の美は、更に人工の美よりも勝れたり。

4. 直下七十丈、壯觀名狀すべからず。

四、左の文字の讀みわけをなせ。



第	弟	矢	失	思	恩
貝	具	技	枝	使	便
姓	性	炭	岩	拾	捨
樂	藥				

第十一課

一、左の語の講讀をなせ。

徑	經	領土	直徑	肉眼	保安林
復	復	楕圓	單葉	複葉	葉脈
		夜半			

二、左の語の讀方を附せよ。

隆	生	生	ナ	リ	メ
網	網	鋸	蓮	網	尖る
		薪	海綿		
		琵琶	淀	法隆寺	芭蕉

例、到、至

三、左の文の解釋をなし、――の所は讀方をも記せ。

1. 四時雪をいただきて潔く、其形白扇を倒にかけたるが如く、美しきは我が國第一の山といふべく、むしろ世界一の名山とも稱すべし、
2. 森林は能く暴風をさへ、其の力をそぐを以て、土砂の飛散を防ぎ、又常に土地をうるほして土砂を落付かしむ。
3. 我は白雲をうなじにまきて、峯高く空にそびえき。
4. 我は山こむる、霞を後にいかだして都に來けり。
5. 我が友にひとり離れて、はるくと五百重のしほ路故里の空なつかしや。

四、左の文中片假名を漢字に直せ。

1. スべて魚類はクラキトコロを喜び、森林のカゲさす

霞コノメ又ナリ又アラ

水中には多くアツマる。

2. キシヤがこのとんねるをツウカするに、五分間をツヒヤす。

3. ナラのダイブツは、日本第一の大いなるブツザウなり。

4. キヨクセンは、チヨクセンよりもやはらかなるカンカクをアタふ。

5. ヒンカウ、ハウセイ、シヨクムにチユウジツにして他のモハンとなる。

第十二課

一、左の語の讀方をとふ。

- 檜、 草、 印刷
- 繪畫、 香爐峯、 漢詩、 餓死

香、畫、番、畫

練る 崩る、

二、左の文中——の所は讀方を附し、且全文を解せよ。

1. 汝よく此書を學ばば、遂に王者の師たらん。

2. 無頼の少年等、口々に罵りて止まず。

3. 張良は内に謀を運らし、韓信は外に兵を用ひて、遂に高祖をして其大業を成さしめたり。

4. 良や老人の無禮をとがめず、信や少年の笑罵を怒らず、其始め小事にしのびしは、後大事を立つるに至りし所以なり。

三、左の語の講讀をなせ。

- 愛讀、 才學、 會得、 目送
- 和漢の學、 佛閣、 指定、 一入
- 梁、 棟木、 桁

四、左の假名を漢字にて書取れ。

- |              |          |
|--------------|----------|
| ナヅ。          | センサウ。    |
| クワツバンインサツシヨ。 | クツ。      |
| メイヨ。         | ユトワザ     |
| ハウナ。         | ゴクシヤウヒン。 |
| ツキシヒニン。      | ケンナク。    |

第十三課

一、左の文を解釋し、――の所に讀方を記せ、

1. 五穀不作の年にも、國中一人の餓死するものなきに至れり。
2. 我はたゞへつ、かの防備かれは稱へつ、我が武勇。
3. 機械の製作に工夫をこらせしが、失敗の上に失敗を重ねて、一時赤貧洗ふが如き有様となれり。

江夫  
失、矢

4. 厚恩いかでか忘るべき。
5. 義仲さめくと。泣きたれば、一座皆よろひの袖をしぼらざるはなかりき。

二、左の語の讀方をとふ。

- |     |     |      |     |
|-----|-----|------|-----|
| 銀杏、 | 寒菊、 | 榛の木、 | 甘藷、 |
| 花筵、 | 切株、 | 霜柱、  | 芋、  |
| 椅子、 | 藺、  |      |     |

三、左の語を漢字にて書取れ。

- |                            |                              |
|----------------------------|------------------------------|
| リンゴク。 <small>(となり)</small> | カジツ。 <small>(くだも)</small>    |
| バクフ。                       | ホシヨウ。 <small>(うけあひを)</small> |
| ダンワ。 <small>(はな)</small>   | レイギ。                         |
| ハミガキユ。                     | タ、ミオモテ。                      |
| モヤウ。                       | ジュンバン。                       |

四、左の語の講讀。

原産地、 渡來、 試植、 盡力、  
 結果、 貯藏、 配布、 考案、  
 握手、

盡字ナリニアラズ

第十四課

一、次の文字の音訓をかけ。

潔、 扇、 費、 過、 葉、  
 眼、 辛、 務、 侍、 練、  
 罵、 限、 刷、 極、 卷、  
 指、 熱、 張、 髮、 活、

二、左の語を漢字にて書取れ。

セントウ (たゝかひのこと) ユシユツ。  
 テキウ (よきはどわひ) ラウドウ。

注、註  
効、功

三、左の語の講讀をなせ。

ガウレイ。 ケンサ。  
 ハツメイ (はじめて考へだす) キヨウキフ。  
 ユシヤウ (さはり) セイケツ (うつくしきこと)

調和、 見參、 曲者、 感覺、  
 無限、 曲線、 販路、 注目、  
 家來、 効用、

四、左の語の讀方を附せ。

磯崎眠龜、 唐草模様、 葡萄、  
 腦、 欄間、 麗し、  
 橙、 斜、 柿、 喇叭、

第十五課

一、左の語の講讀をなせ。

消、確  
選、推  
撰、選  
撰、著

健、建

陵、凌、稜

世界有數、營倉、周密、破裂、  
規律、消燈、起床、酒保、  
點呼、選鑛場、

二、次の文を解釋し、尙——の所は讀方をも附せ。

1. 四周の風光麗はしく、神氣自らさわやかなるを覺ゆ。
2. 健全なる精神は、健全なる身體に宿る。
3. 寄する雲霞の敵兵に、行方も知らず落ち給ふ。
4. 老樹路をさしはさみて、晝尙小暗し。
5. 神鹿の三々五々友を呼び、人に近づき來り食を求むるも愛らし。

三、左の語の讀方をとふ。

銛、爐、唐紙、鳶、  
稗、豚肉、山羊、陵

燈籠、捕鯨

四、左の語の中片假名の所を漢字にて書取れ。

喇叭のアヒツ。アラシ。  
病人のカンゴ。血をハイザウに送る。  
ゲキケンのけいこ。ハオリを着る。  
ナウはメ、ミミ、ハナ、クナから色々のハウユクをうける。  
ユウワクワイに出席す。

第十六課

一、左の語の講讀をせよ。

榮、營  
堅、又、土、土、ナ、リ、  
料、科、  
料、科、

悲鳴の聲、臭氣、繁榮、盛夏、  
噴出、復雜、傷害、強健、  
強堅、材料

二、左の歌を解釋せよ。

1. 天の原ふりさけ見れば春日なる、

三笠の山に出てし月かも。

2. 古の奈良の都の八重櫻、

今日九重に匂ひぬる哉。

3. 人はいざ心も知らず故里は、

花ぞ昔の香ににほひける。

4. 来て見れば、こゝも櫻の峰つづき、

吉野初瀬の花の中宿。

匂、匂、匂、匂

にほひ

初衣ハツキ 初ハツ 示シ 加カ ニニ アア ララ

三、左の語を漢字にて書取れ。

サンユウヒン。

ケンナヤウ(けんををさめる役所)

サイバンシヨ。

ハクブツカン。

クワンランシヤ(見る人)

ダエンケイ。

傳、傳

四、左の字の音訓をとふ。

クライグラ(系のこと)

ガシ(うゑ)

チンジユン(おとなしい)

セイシツ(うまれつき)

傳、渡、盡、試

麗、墓、望、現

厚、握、貧、續

營、覺、臨、争

消、寢、破、罪

第十七課

一、左の文を解釋し、――の所は讀方をもつけよ。

1. こゝにまうづるもの誰かはそのかみを思ひ出で、  
皇室の御威徳を仰がざらん。

2. 結構頗る大に眺望甚だ美なり。

望 低キヨリ 又ハ遠方  
希 眺望、人望  
臨 高キヨリ 窓、窓  
臨 高キヨリ 窓、窓  
臨 高キヨリ 窓、窓

緑、緑

術ナリ求ニアラズ

行カウ熱ア塾ン

磐、盤

3. この山老樹繁茂して、翠緑したるが如し。  
4. 我が國の古美術は、こゝに其粹を集めたりといふべし。

二、左の語の講讀をなせ。

行在所、 供御、 技師、 熟考、

耕地整理、 専門家、 臨席、 蹴鞠、

販賣、 節分、

三、左の語の讀方をとふ。

牡丹、 磐余、 大神神社、

多武峯、 樞原、 飛鳥の安居院、

畝傍、 笠置山、 春日神社、

建立、 長谷の観音、

四、左の文字の音訓をかけ。

置、 堅、 胸、 裂、

珍、 豚、 雞、 霞、

筋、 巡、 換、 預、

競、 昔、 乳、 圍、

積、 號、 逃、 姉、

第十八課

一、左の語の講讀をなせ。

光景、 壯麗、 往昔、 規模、

別離、 遷都、 百花満開の候、

崩御、 行宮、

二、左の語を漢字にて書取れ。

キヂ(もちつ) カナク(いへにか)

シドウシヤ。 カンタイ(ぐんかん)

壯、 莊  
遷ニ遷ニ都  
移ニ移ニ住ニ轉ニ  
候、 侯

頂、腹、麓。

デンタツ。(つたへるた)

スキライタイ。

ミツバチ。

フツウ。

シユクレン。

シヤフ。(ひきるま)

三、左の字の讀方をとふ。

水分神社、

麓、

樽、

軸木、

隱岐、

會稽山、

毛氈、

壇浦、

嚴島、

赤銅、

四、次の御製を謹みて解釋せよ。

1. さして行く笠置の山を出てしより、  
天が下にはかくれ家もなし。
2. 花にねてよしや吉野のよし水の、  
まくらのもとに石走る音。

群、郡、勤、動、團體、團隊

志士仁人無<sub>三</sub>求<sub>二</sub>生<sub>一</sub>以<sub>レ</sub>害<sub>レ</sub>仁<sub>三</sub>。有<sub>二</sub>殺<sub>一</sub>身<sub>以</sub>成<sub>レ</sub>仁<sub>三</sub>。論語衛靈公篇(論語衛靈公篇)見<sub>レ</sub>義而不<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>勇也(論語爲政篇)見<sub>レ</sub>物、見<sub>レ</sub>比、見<sub>レ</sub>卓、見<sub>レ</sub>、

第十九課

一、次の文を解釋し、――の所に讀方を記せ。

1. 營々として、寸時も休まず。
  2. 蜜蜂の群集生活を營むを得るは、共同團結して勞働をいとはず、有力なる武器を備へて敵軍にあたり、團體の爲めには身命ををしまざるによる。
  3. 臣下として一天萬乗の君を遠國へ遷し奉ること、無道の極みなり。
  4. 志士仁人は生を求めて、仁を害することなし。
  5. 義を見てせざるは勇なきなり。
- 二、左の語の講讀をせよ。

飼養、	敵視、	銳利、	防禦、
氣候不順、	警固、	風聞、	主上、



看看守、看護、  
觀觀望、觀客、  
壯觀

モミチ

臨幸、

上聞、

三、左に示せる鳥の名を讀め。

鵠、 鴻、

雉、

鷗、

鶉、

鷺、 千鳥、

雲雀、

眞鶴、

雁、

四、左の語を漢字にて書取れ。

クワンゼン(かけて居らぬこと)

ケウイク(をしへること)

モミヂのニシキをナる。

キセンのツウカウタえず。

ユウザウ(くみたてつくる)

クウチウヒカウキ。

ジュンヤウカン(ぐんかん)の一種

ロをソロへて船をユク。

第二十課

一、左の語の讀方と解釋とを記せ。

所存、

千差萬別、

敏速、

國運の發展、

優勢、

擊沈、

獲、護、稜

捕獲、

船脚、

潛航、

笑罵、

二、左の歌句を解せよ、尙——の所は讀方を記せ。

1. 歌書よりも軍書にかなし吉野山。

2. 歸らじとかねて思へばあづさ弓、

なきかずにいる名をぞとどむる。

3. これはくくとばかり、花の吉野山。

4. 天勾踐を空しうする勿れ、時に范蠡なきにしもあらず。

三、左の語の讀方をつけ、且何月にあたるかを記せ。

如月、 水無月、 長月、

卯月、 彌生、 菊月、

霜月、 神無月、

四、左の文字の音訓をとふ。

かぞ

范、苑

卯、卯、印

離、崩、櫻、飼、銳、  
 致、遷、圖、廻、操、  
 輪、專、縱、電、始、  
 追、茂、眺、耕、仰、

第二十一課

一、左の語の講讀をなせ。

擊破、經營、井然、舊蹟、  
 縱貫鐵道、尺、無盡藏、興味、  
 失敗、眺望、

蹟、續

二、左の文の解釋をなし、――の所は讀方をも記せ。

1. 越王勾踐つぶさに辛苦をなめて報復を圖り、范蠡といふ無二の忠臣の助を得て、遂に吳を滅して會稽の恥を雪ぐことを得たり。

朝セツリネンゴロ  
チイースベテ  
かをり

2. 源平の昔語に、人の感興を動かすこと甚だ切なり。
3. 高く鼻つくいその香に、不斷の花のかをりあり。
4. 兄弟は車の兩輪の如し。
5. 昔都大路をねり行きたりし、絲毛の車は如何に優美なりけん。

三、左の語句中――の所を漢字にて記せ。

カラフトにシュツチヤウす。  
 ノウフはカウサクにシウジす。  
 ダンシはヘイエキにフクするギムあり。  
 ウンユカウツウのベンあり。  
 キヨウシンクワイのヨキヤウを見る。  
 パウシのキシヤウ。  
 シヤウジとカラカミ。

大水のためタイパウがきれた。

四、次の字の読みわけをつけよ。

午牛。 釘針。 緑縁。

滅滅。 菅管。 卵印。

拂佛。 末未。 博傳。

電雷。 僅謹。 敵適。

輸論。 旬旬。 儀議。

第二十二課

一、左の語の讀方をとふ。

蕃人、竹筏、 檜、 椎、 樟腦、

疾風、 吹雪、 春雨、 時雨、 村雨、

二、左の文の解釋をなし、且――の所には讀方をつけよ。

1. 軍事上に應用せらるゝも、決して座上の空談にあら

蕃、番  
椎、推

決ツナリ  
ニアラズ

こそこなれ  
雨雪、雲霧、  
霜露、霰霞、  
曇

具、貝  
歎、勸

ざらんとす。

2. 驅逐艦の名こそ更に優美なれ。

3. 雲霧を利用し雨雪を物ともせず風の如く急進する  
勇壯なる有様もおもひ見るべく、又優にやさしき武  
人の風流もしのばる。

4. 堂々敵と決戦するを目的とす。

5. 經營着々その効を見るに至る。

三、左の語の講讀をなせ。

規模、 元服、 具足一領、 平然、

風土、 丹誠、 謹嚴、 歡心、

突貫、 異口同音、

四、左の語句中の片假名を漢字にて記せ。

ナキウは圓いといふシヨウメイ。

友だちとヤクソクす。  
 タツシヤなラウジン。  
 町にセツキンせり。  
 人をセウダイするジユンビ。  
 道をアンナイす。  
 魚をレウリす。  
 エイセイに害あり。  
 ゼンレツとのカンカクは手をアげてとれ。

第二十三課

- 一、左の文を解釋し、且——の所には讀方をつけよ。
1. この社に參拜すれば、そぞろに當年を追懷するの情にたへず。
  2. 交通の利便いよく、ひらけ、産業の發達は益、多望に

當口田ナリ  
 一〇田ニア  
 ヲメ  
 たへず  
 利便、便利

衰、哀

座坐

鹽壇

なりたり。

3. 散々に撃破せられたり。
4. 馬に全速力を出させて雲を霞と逃げのびたり。
5. 一家和合せざる時は家道次第に衰へて、笑聲の戸よりもるゝ事なかるべし。

二、左の語の講讀をなせ。

歡喜	光臨	經濟	得失
滋養	坐食	年齒	無爲
隻句	光陰		

三、左の語の讀方をとふ。

良否	鼓手	鹽梅	泣號ぶ
臥す	瀑布	般若	提灯
喉			

四、左の文字の音訓を記せ。

妹、舉、優、譽、戲  
 悔、雌、雄、波、壁  
 違、寄、愚、絶、浮  
 獲、底、任、省、勉

第二十四課

一、左の語を漢字にて書取れ。

マンゾク。 ヨンダテ。  
 ザシキ。 イウギ。(あそびのこと)  
 辛。(食物をこなす器官) パウセキクワイシヤ。  
 アイサツ。 サイホウ。(きものをぬふこと)  
 ラウカ。 シヤウナウ。(薬品の名)

二、左の文を解釋し、且――の所には讀方をも記せ。

又亦

いはんや...  
おや

未、末  
練、鍊

1. 身體健全なる人は、精神も亦快活にして、耳目にふるるもの皆樂し。
2. 公明正大にして、心中一點の曇なきものはよく笑ふ。
3. 他人の悪事短所を嘲り笑ふは、己の品位を下す所以なり、いはんや我に優れる人をねたみ、其聲譽を傷つけんとして笑ふ者に於てをや。
4. 花客に接して愛敬を盡すは商人の美德なれども、みだりに聲色を作り、へつらひ笑ひ中心却て親切の念なきものは、むしろ不愛敬なりとも信實の心あるものに如かず。

三、左の語の講讀をなせ。

經費、未練、訪問、寄食、  
 奇勝、傳説、手練、機敏、

左往右往、維持、

四、左の字の讀方をとふ。

鵜、鰻、鮎、蟻、狐、  
狼、蚯蚓、蜘蛛、蜂、鯀、

第二十五課

一、左の語の講讀をなせ。

牧、枚、  
域、城、  
醸造、 牧畜、 需要、 供給、  
版圖、 唯一、 流域、 伐採、  
開拓、 凍結、

二、次の片假名を漢字になほせ。

キセツにテキタウなるシヨクモツ。  
ヤサイは味もよくセウカもよろし。  
ダイドコロをキレイにすべし。

鮭、鱒、桂、  
薯、樽、

丹青、  
誠、

三、左の字の讀方をとふ。

鮭、鱒、鱒、鰓、  
燕麥、 裸麥、 薯蕷、 臘豚獸、  
豌豆、 榎松、 馬鈴薯、

四、左の文を解釋し、且——の所の讀方を記せ。

1. 身を立て父母をあらはすも、産を破り祖先をはづかしむるも、功業を成し公益を廣むるも、將又無爲にして一生を終ふるも、唯時間を利用するとせざるとにあり。

2. 筆勢非凡にして丹青の妙いふべからず。  
3. 水の奇觀は瀑布に如くはなし。



第二十七課

儀、議

採探集  
取捨受取  
執事固執

致、到

遺、遣

回廻廻

一、左の文を解釋し、――の所の讀方を記せ。

1. 武勇のほまれ細戈、千足の國の名に負ひて、禮儀は早く唐人も稱へし其の名君子國。

2. 智は東西の長を採り、文明古今の粹を抜く。

3. 耕地整理は縣下諸村に先んじて著手し、昨年既に之を完成せり。

4. 臣あへて死力を盡し忠節を致すべし。

二、左の語の講讀をなせ。

灌溉、排水、二毛作、犯罪、

遺風、輕便、辛抱、廻轉、

同胞、努力、

三、左の語の解釋をなせ。

を、し

こそため

網、網

共同協同協  
回復回復

を、し。 夜もすがら。 ひたすら。

きぬた。 うちかけ。 そぞろ。

ささやか。 あなむざん。 今夜こそ討ため。

いかで討たるべき。

四、左の語の讀方をとふ。

撫網、股引、胴衣、瑞穂國、

鮎、袴、棺、澎湖島、

打狗港、基隆港、

第二十八課

一、左の語は講讀をなせ。

萬機の政、大御心、一致協同、

連敗、回復、組織、

空前、距離、旗艦、



哨艦

二、左の語の片假名を漢字にて記せ。

ケウイクチヨクゴ と ボシンセウジヨ。

シंगाウのハタをかゝげる。

クワサイにあふたソングイ。

船がナンボツした。

フヅクヒン。

テキをユウゲキする。

シユクレンなシヨクユウ。

ダウロのシウゼン。

三、左の文を解釋し、――の所の讀方を記せ。

1. 之を拜讀する者誰か御盛徳の山よりも高く、御仁愛の海よりも深きを仰ぎ奉らざらん。

2. 治に居て亂を忘れず。

3. 祖宗の大業を承けて、明治の聖世を開かせ給へる御盛運故なきにあらず。

4. 皇國の興廢此一戦にあり、各員一層奮勵努力せよ。

5. 我軍の損失死傷の僅少なりしは、歴代神靈の加護に依るものと信仰するの外なく、嚮に敵に對し勇進敢戦したる麾下將卒も、皆此の成果を見たるに及んで、唯唯感激の極言ふ所を知らざるものゝ如し。

四、左の文字を讀みわけよ。

復、	似、	師、	熟、
復、	以、	帥、	熱、
綱、	徑、	候、	位、
綱、	經、	侯、	泣、
裁、	働、	御、	連、
裁、	動、	卸、	運、

承承知  
受承諾  
受受納  
廣、癥

卒  
シツツ  
シモモ  
シオハル

決、快、畫、畫、錦、綿

第二十九課

一、左の語の讀方を記せ。

鋼、網

鬱陵島

陽炎

漣

鋼鐵

鎗、輪、諭

眞鎗

鍛工場

汽鐘

鐵鎚

吋、呎

吋

鑄る

二、左の語の講讀をなせ。

命中

無二無三

四分五裂

包圍

捕虜

奇績

幕下

綿密

御稜威、無慮

三、左の文中片假名の所を漢字になほせ。

1. ヘイカはナウイウなる、我がシンミンを深くシンラ

イし給ふ。

2. 船を造るユウバはいづれもダイキボにしてユトゴ

トクジヨウキ又はデンキの力をリヨウす。

3. 日々のテンキは我等のセイクラツに大なるクワンケ

イあり。

4. ドウブツはユキフサヨウによりて、クウキナウのサ

ンソをスヒタンサンガスをハキダす。

5. テキは今はノガれられぬことをカクゴして、シラハ

タをかゝげてカウフクセリ。

四、謹しみて左の御製を解せよ。

國を思ふ道に二つはなかりけり、

軍のにはに立つも立たぬも。

2. 波風のしづかなる日も船人は、

かぢに心を許さざらなん。

幕、幕

第三十課

一、左の文中——の所に讀方を記し、且全文を解釋せよ。

1. 問はばや遠き世々の跡。

2. 若宮堂の舞の袖しづのをだまきくりかへしかへせし人をしのびつつ。

3. 鎌倉宮にまうでては、盡きせぬ親王のみうらみに悲憤の涙わきぬべし。

4. 援軍の來たらん日も亦期すべからず。

5. 鞆にあぎとふ鯛の如し。

二、左の文字の讀方を記せ。

龍骨、肋骨、工廠、三菱

屏、圓錐、柵、長篠城

繩、弦

援後援兵  
助救助  
援助手、補助役

肋、助

錐、椎、推

繩、蠅

測、側、則

三、左の語の講讀をなせ。

打電、設計圖、切斷面、縮圖

技手、船渠、氣象、測候所

倉庫、感泣

四、左の語の片假名の所を漢字にて書取れ。

フガウでキサイス。 ケイサツシヨ。

キフキン。 石炭のセウヒ高。

米をキヨウキフす。 城中リヤウシヨク乏し。

オンジュンなるセイシツ。 シユシのサンブ。

レキシのキヤウクラシヨ。

第三十一課

一、左の語の讀方をとふ。

鱸、調伊企雛、柚山、銀杏

喜喜憂、喜怒  
悅喜悅、悅樂  
歡歡樂、歡迎

敗敗軍、勝敗  
失敗、敗北  
破破産、破滅  
破産、破滅  
壞破壞、壞亂

懌 穢

轍

禪尼

二、左の語の講讀をなせ。

高千穂、 觀測、 揭示、 警報、

調査、 要素、 腐敗、 密接、 古戰場、

露坐、 興亡、

三、左の文中片假名の所を漢字にて書取れ。

1. シウジツ、ラウドウして、一家のセイケイをキデス、

2. 文明のシンボするにシタガひ、分業はマスマス、ハツ  
タツすべし。

3. ハルは島山カスミにツ、まれてホムるが如く、ナツ  
は山海ミナミドリにしてメサむるばかりなり。

4. 二物アヒマツにアラざればヨウをナシガタし。

5. 近年クウナウヒカウキのハツメイオユリ、クウナウ  
のカウツウカイシせられんとす。

四、左の語の講讀をなせ。

英雄、 豫測、 家政、 慶賀、

山門、 消息、 再舉、 光榮、

長圍の計、 壯士、 良人、 設備、

普及、

第三十二課

一、左の文を解釋し、且——の所は讀方を記せ。

1. 水方にみなぎれり。

2. 古今勇士の意氣甚だ相似たらずや。

3. 外温順愛敬の徳を守りて、内確固たる志操を持し、如  
何なる變に際しても自若として其常を失はざるは

舉、譽  
莊、壯

方マツサカリ  
將オツツケ、  
ヤガテ

建、健、健

關決闘、争闘  
戰決闘、戰争  
激戰、戰役

日本女子の美德なり。

4. 校舎の建築は質素堅固を主とし外觀美ならざれども通風採光二つながら其よろしきを得。

5. 兩虎共に闘へば勢共に生きず。

二、次の文字の音と訓とを記せ。

承、誠、織、誘、包

僅、泣、鍛、整、帶

掲、枯、蒸、援、勵

戒、好、及、打、組

三、左の語の講讀をなせ。

學齡兒童、就學兒童、周到

推舉、水魚の交、消長

起原、優良、首位、馬匹

就去就、成就  
附附近、附屬  
付送付、附屬  
着到着、着服  
原即位、源

四、次の文中片假名の所を漢字になほせ。

1. 四面ミナ海なる我がテイユクはユクカバウギヨの上よりいふも、シヤウゲフホゴの上よりいふも、常に強大なる海軍を有せざるべからず。

2. ワラはんとホツせばエイセイにチウイし、シンタイをケンゼンにすべし。

3. 同じザイレウにても、レウリのアンバイによつてはマツタク別物の如くアヂははる。

4. ドウギ。モ、ヒキ。  
ハカマ。ハオリ。  
クツシタ。

第三十三課

一、左の語の講讀をなせ。

比、此  
隣、此

況シナリ  
ソニアラズ

- 急務、精巧、破産、誤解
- 千里比隣、嗜好、販路、愛顧
- 炭礦、蒔繪

二、左の語の讀方をとふ。

- 撫順、牛莊、鴨綠江、倫敦
- 巴里、伯林、西班牙、葡萄牙
- 忽必烈、栗鼠

三、左の文を解釋し、且——の所は讀方をも附けよ。

1. 商人は常に全世界に於ける物價の高低に注意し、需  
要供給の情況に精通するを要す。
2. 正直は最善の商略なり。
3. 強兵を以て知られたる我が國は、富國の道を講ずる  
こと、今日の急務にして、海外貿易の發展を圖り大い

勤トナリ、勉ニナリ  
力ニナリ、務ニナリ  
力ニナリ、務ニナリ  
力ニナリ、務ニナリ  
力ニナリ、務ニナリ

熔、溶

に國富を増殖するは、商人の國家に對する義務なり。  
4. 富國の實の擧ると擧らざるとは、我が商人の信用勤  
勉機敏の如何に存す。

四、左の片假名の所を漢字にて書取れ。

- シンナクラクセイシキ。 ノユギリのハ。
- シヨクブツのサイバイ。 ドウブツのシヤウ。
- ヤウサンゲフ。 ボクナクゲフ。
- キヌオリモノ。 シツキの産地。
- 世のヘンセンに従ふ。
- ユクモツのシウクワクをゾウカす。

第三十四課

一、左の語の讀方をとふ。

- 蘭相如、廉頗、蒲生、熔岩

桐、銅、洞

桐生、會津塗、遼陽、獨逸、露西亞、廣小路

二、左の語の講讀をなせ。

割、割、旋、施

埠頭、屈指、混雜、駐劄、根據地、集散地、雅麗、凱旋、遊牧の民、救濟

三、左の文中——の所に讀方をつけ、且全文を解釋すべし。

皆此ニアラズ

1. これらの山は、皆我が同胞の血をそゞぎし地ならざるはなし。

至乃至、至善  
一到者、到來

2. 満目の曠野雪に埋れて食物の缺乏せる頃に至れば温暖なる地方に移らんと欲する者、期せずして相集る。

3. 遠く之を望めば、あだかも洋々たる江流を見るが如

き壯觀を呈することあり。

4. 飢餓刻々にせまるが故に、次第に行進を早め遂に危害を顧みず向ふ處何物をもはばからずして突進す。

四、左の語句中——の所を漢字にて書取れ。

1. シガイのハंकワなる所、カヘツてミナハバセマシ。

2. このギンカウはセツリツも古く、シホンも多く、シンヨウもアツシ。

3. 老後のアンラクをネガふ者は、シヤクネンのシンクをいとふべからず。

4. フウキは人のホツする所、センセンは人のいとふ所。  
5. シツナイのサウヂ。

第三十五課

一、左の文を解釋し、尙——の所は讀方をも記せ。

永永遠遠、永永久久  
長長髮髮、長長命命  
老老いて

食シヨク、檢ケン、儉ケン

險ケン、檢ケン、儉ケン  
暴ボウ、慕ボ  
迎イ、印イン、ナリナリ  
アア、ララ、ズズ

1. 永遠の幸福を望む者は、一時の勞苦を忍ぶべし。
2. 少壯有爲の間を徒に遊び暮さば、老いて後悔ゆともかひなかるべし。
3. 位人臣の榮を極め、富天下に冠たるも、自ら省みてやましき所ある者は苦多く樂少し。
4. 疏食をくらひ、水を飲み脰を曲げて之を枕とするも、樂又其中に在り、不義にして富且貴きは我に於て浮雲の如し。

二、左の語の講讀をなせ。

- |       |    |    |    |
|-------|----|----|----|
| 進取の氣象 | 危険 | 希望 | 客遊 |
| 探檢    | 暴舉 | 無謀 | 遠征 |
| 歡迎    | 引見 |    |    |

三、左の句の片假名の所を漢字にて書取れ。

1. シシユツはシウニフのハンキの内にて定むべし。
2. テイシヤバのユンザツ。
3. ゲタバユのセイトン。
4. シンルキエンシヤのカウサイ。
5. シゼンジゲフ。

四、左の語の讀方を記せ。

- |     |     |     |    |
|-----|-----|-----|----|
| 塊太利 | 佛蘭西 | 維也納 | 戸棚 |
| 錠   | 竈   | 壺   | 膳  |
| 猿   | 燕   |     |    |

第三十六課

一、左の文字の音訓を記せ。

- |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|
| 彪 | 移 | 顧 | 憤 | 慮 |
| 虎 | 狹 | 鬪 | 誤 | 除 |



義、儀、議

思、恩

築、據、捨、傍、仇、側、探、濟、賤、奪

二、左の語の講讀をなせ。

當然、儒者、義足、紳士、聽衆、神曲、統領、獸待、香花、走卒、主張、安眠

三、左の文を解釋し、且——の所には讀方を記せ。

1. 引込思案の人は、徒に其結果を思ひわづらひて、優柔不斷其の事業に取掛らさる中に良好なる時機を失ふこと多し。

2. 赤穂浪士が數年の苦難を忍び、遂に主君の仇を報じて從容死に就けるは、史上の一美談たるのみならず、日本武士道の精華を發揮せるものといふべし。

計、計畫、設計、統計、謀、遠謀、陰謀、謀、後圖、不圖、圖、後圖、不圖、量、推量、度量、料、思料、測、測長、觀測、治、治

捨、拾、悔、悔、海、悔

乏、之

3. 入るを計つて出づるを制す。

4. 市井の感化を恐れて三度其居を遷す。

四、左の語の講讀をなせ。

反覆直言、恭儉、圓滿、治績、有司、人格、門地、品格、公德心、度量、德義、利器

第三十七課

一、左の語の講讀をなせ。

喜捨、復仇、奪略、公共營造物、輕侮、舉止、容儀、繁簡、強制、産業組合

二、左の文を解釋し、且——の所は讀方をもつけよ。

1. 人民に自治の精神乏しき時は、いづくんぞ其美果を

收又ニナリ  
 收收入ラ  
 治治入ラ  
 治治入ラ  
 修修入ラ  
 納納入ラ  
 納納入ラ  
 奉修政領收ラ  
 納納治治納

瓜、瓜  
 シツメニツメナ  
 シツメニツメナ  
 メアリ

直接、間接  
 裁、裁  
 率、率

收むるを得んや。

2. 我が國は萬世一系の天皇之を統治し給ひ、天皇は國  
 務大臣の輔弼によりて一切の政務を親裁せさせ給  
 ふ。

3. 萬機公論に決するの聖旨に基づく。

4. 質素を旨とせざれば、いつしか文弱に流れ輕浮の風  
 にそみ心も無下に賤しくなりて、節操も武勇も忘れ  
 果て、世人の爪弾を受くるに至るべし。

三、左の語の講讀をなせ。

直接國稅、 終身、 資格、 提出、  
 協贊、 裁可、 上奏、 建議、  
 統率、 股肱、

四、左の語の片假名を漢字にて記せ。

1. シヤクワイのキリツをタツトぶ。
2. ギキンのセンキヨ。
3. キフ金をカンイウス。
4. ケイヒのヨサンアン。
5. キゾクキンとシウギキン。

第三十八課

一、左の語の講讀をなせ。

技藝、 烏合の衆、 信義、 順逆、  
 服膺、 處世、 人倫、 不具者、  
 公平無私、 至誠奉公の赤心、

二、左の文を解釋し、且——の所は讀方をもつけよ。

1. 要は下情上達の道を開かせ給ふ聖慮に外ならず。

倫、論

齊景公問政於孔子。孔子對曰。君君臣臣父父子子。君不君。臣不臣。父不父。子不子。雖有禮樂。吾將何用之。論語顏淵篇

2. 身命をすつること鴻毛よりも輕し。  
3. 海行かば水づくかばね、山行かば草蒸すかばね、大君の邊にこそ死なめ顧みはせじ、

4. 君君たり臣臣たり父父たり子子たり。  
三、左の語の意義をとふ。

みそなはず。おはします。  
のろし。なづむ。  
おびただし。うまし國。  
かまびすし。いたはる。  
血氣にはやる。ゆめ忘るな。  
待ちわぶ。

四、左の文字を讀みわけよ。

秦、奏、低、底、護、獲、穫。

儉、險、檢、沒、役、設、  
他、池、地、材、村、林、  
積、績、蹟、列、例、裂、烈、  
興、與、譽、舉、墓、暮、幕、  
待、侍、持、特、詩、清、晴、精、情、  
往、住、注、註、柱。

第三十九課

謹みて左の勅語を奉讀せよ。  
朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルユト宏遠ニ德ヲ樹ツル  
ユト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシ  
テ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育  
ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦  
相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修

メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣  
メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ  
義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キ  
ハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺  
風ヲ顯彰スルニ足ラン。

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ  
遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ  
悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンユ  
トヲ庶幾フ。

#### 第四十課

謹みて左の詔書を奉讀せよ。

朕惟フニ方今人文日ニ就リ月ニ將ミ東西相倚リ彼此相濟  
シ以テ其ノ福利ヲ共ニス朕ハ爰ニ益國交ヲ修メ友義ヲ淳

シ列國ト與ニ永ク其ノ慶ニ賴ラムユトヲ期ス願ミルニ日  
進ノ大勢ニ伴ヒ文明ノ惠澤ヲ共ニセムトスル固ヨリ内國  
運ノ發展ニ須ツ戰後日尙淺ク庶政益更張ヲ要ス宜ク上下  
心ヲ一ニシ忠實業ニ服シ勤儉產ヲ治メ惟レ信惟レ義醇厚  
俗ヲ成シ華ヲ去リ實ニ就キ荒怠相誡メ自彊息マサルヘシ  
抑我カ神聖ナル祖宗ノ遺訓ト我カ光輝アル國史ノ成跡ト  
ハ炳トシテ日星ノ如シ寔ニ克ク恪守シ淬礪ノ誠ヲ輸サハ  
國運發展ノ本近ク斯ニ在リ朕ハ方今ノ世局ニ處シ我カ忠  
良ナル臣民ノ協翼ニ倚藉シテ維新ノ皇猷ヲ恢弘シ祖宗ノ  
威德ヲ對揚セムユトヲ庶幾フ爾臣民其レ克ク朕カ旨ヲ體  
セヨ。

## 第二編 綴方科

### 第一章 口語と文語との対照

#### 第一節 普通文

##### 第一課 その一

#### 口語

櫻の花が咲く。

こゝに書物がある。

よく困難に耐へる。

#### 文語

櫻花咲く。

こゝに書物あり。

よく困難に耐ふ。

#### 例

雨が降る。

川のあなたに森がある。

交通が絶える。

朝早く起きる。

門戸を閉ぢる。

競走に負ける。

競走に負く。

生きる命。

生くる命。

日も半ば過ぎる。  
 大に懲りる。  
 樹の枝が朽ちる。  
 石を投げる。  
 船を港に寄せる。  
 家を建てる。  
 人を尋ねる。  
 書物を教へる。  
 君を諫める。  
 氏名を覚える。  
 木の葉が枯れる。  
 杉の苗を植ゑる。  
 落ちる葉。

得る物。

得る物。

強ひる酒。  
 恨みる言葉。  
 報いる事。  
 懲りる仕事。  
 告げる話。  
 寄せる波。  
 育てる小供。  
 兼ねる務。  
 貯へる金額。  
 染める色。  
 榮える御代。  
 戯れる蝶。  
 植ゑる菊。

學問する。

學問す。

旅行する。  
 靜にする。

第二課 その二

口語

文語

例

美しい花。

美しき花。

楽しい春。

今日は喜ばしい。

今日は喜ばし。

強い力。  
 今は悲しい。

暖な天氣。

暖かなる天氣。

赤い旗。  
 靜な波。

人に譽められる。

人に譽めらる。

巧な細工。  
 人に勧められる。

狼に食はれる。

人に推される。

人に書物を讀まさせる。

見える限りは櫻である。

行かねばならぬはずの所。

人に推さる。

人をして書物を讀ましむ。

見ゆる限りは櫻なり。

行くべき所。

敵に討たれる。

馬に荷物を運ばさせる。

一群の生計を維持するものは働蜂である。

云はねばならぬ所。急がねばならぬ道。書かねばならぬ繪

收穫が少いそうな。(收穫が少からう。)

日本第一と云つてよい。

(日本第一と云ふことが出来る。)

勉強しなさい。

收穫少かるべし。

日本第一と云ふべし。

勉強すべし。

世にあらはれる時があるであらう。老後に悔いてもかひがなからう。港の内が広いから大きな船艦を入れることが出来る。推して知ることが出来る。早く行きなさい。又お出でなさい。小さく書きなさい。

第三課 その三

口語

皆出で行った。

昔兒島高德と云ふ  
武士があつた。

海へ行かう。  
犬を育てよう。

文語

皆出で行けり。  
(皆出で行きぬ。)  
(皆出で行きたり。)

昔兒島高德と云  
ふ武士ありけり。  
(武士ありき)

海へ行かむ。  
犬を育てん。

例

地圖を寫した。  
布を裁つた。  
衣服を縫つた。  
雨がやんだ。  
雨が降つた。  
孔子が職を退いた  
後も弟子の道を問  
ふものが益多かつ  
た。  
之から烈士喜劔の  
ことを語らう。

まのあたり見るが  
やうである。

山へは行かぬ。

再びは行くまい。

見たいものである。

まのあたり見る  
が如し。

山へは行かず。

再び行くまじ。

見たきものなり。

明日は天が晴れよ  
う。  
全く復仇の事を忘  
れたがやうである。  
不義の富貴は浮雲  
のやうである。  
虫をも殺さぬ。  
雨の爲に花が咲か  
ぬ。  
あのやうな人とは  
交るまい。  
それは出来まい。  
聞きたいものであ



十から四ひく。

聞えるのは虫の聲ばかりである。

十より四ひく。

聞ゆるは虫の聲のみ。

第四課 その四

口語

櫻の樹が多いので

文語

櫻樹の多きを以

例

庭園で名高い竹林

る。  
送りたいものであ  
る。  
朝から夕まで。  
之からは見るこ  
が出来まい。  
之ばかりでも二十  
種ある。  
云ふばかりで行は  
ない。

名高い。

之を知つて居るか。

之を使つてはならぬ。

木の皮で織つた物。

て名高し。

之を知れるか。

(知れりや)  
之を使ふべからず。

(之を使ふなかれ)  
木の皮にて織り  
たる物。

進むと云ふと山に

進めば山に達す。

行くと云ふと必ず

院がある。  
昔から武勇で名高  
いのは我國である。  
聞いて居るか。  
遊んで居るか。  
紙屑を捨ててはな  
らぬ。  
落書してはならぬ。  
絲で編んで作つた  
物。  
漆で塗つてみがい  
た物。  
行くと云ふと必ず

達す。

珍しくはない。

もう着いたであらう。

歌はうとするけれどもできぬ。

あへる。

讀むといふと知ることが出来る。

新しくはない。

惜しくはない。

三倍の大きさであつたであらう。

あのやうには怒ら

んだであらう。

進まうとするけれども

歩くことができぬ。

讀まうとするけれど

できぬ。

皆兵役につく覺悟をもたねばならぬ。

捕へようとするにげる。

袖をしぼらぬ者はなかつた。

皆兵役につく覺悟を有せざるべからず。

捕へんとすればにぐ。

袖をしぼらざるはなかりき。

どもできぬ。

後れても行かねば

ならぬ。

十分の注意をせね

ばならぬ。

にげやうとすると

追へる。

行かうとすると止

める。

笑はぬものはなか

つた。

手に持つて居らぬ

ものはなかつた。

早かつたから大にほめた。

早かりしかば大に賞したり。

白かつたからよく見えた。

二度と見られぬ。

再び見るべからず。

太かつたから強かつた。

之を見てはならぬ。

之を見るべからず。

(前にあり)

第五課 その五

口語

文語

例

櫻樹がない所はない。

櫻樹あらざる處なし。

笑はぬ者はない。作物の害せられぬ。

持歸らぬ者がある  
と入ることを許さぬ。

持ち歸らざるものあれば入ることを許さず。

いものはない。  
命令をきかぬ者が  
あるとすぐに罰する。

落ちることはなからう。

落ちることなかるべし。

揃はぬものがある  
と其を除ける。  
店を閉ちることは  
なからう。

利益であるであらう。

利益なるべし。

風の爲に倒される  
ことはなからう。  
迷惑であるであらう。  
行くのであるであらう。

休養することがな  
いと遂には衰へる  
であらう。

休養することな  
ければ遂には衰  
ふべし。

らう。

學ぶことがないと  
知ることもないで  
あらう。

國家は一日も守り  
がなくてはならぬ。

國家は一日も守  
なかるべからず。

人には勇氣がなく  
てはならぬ。

急がないならば負

急がずば負くべ

大國民の品格を高  
める用意がなくて  
はならぬ。  
種を蒔かぬならば

けるであらう。

し。

わけがないではな  
い。

故なきにあらず。

生えぬであらう。

送らんだならば取  
りに来るであらう。  
云ふたことないで  
もない。

似て居るではない  
か。

相似たらずや。

かういふ人がない  
でもない。  
多いではないか。  
難しいではないか。

どうして殺すこと  
ができやうに。

いかで殺されん。

どうして歸ること  
ができやうに。  
どうして戦ふこと  
ができやうに。

我等が學ばねばならぬことではないか。

我等の學ぶべきことならずや。

商人が守らねばならぬ徳義ではないか。  
云はねばならぬ時機ではないか。

口語

第二節

書簡文

文語(候文)

例

之は櫻の花であります。

之は櫻花に候。御座候。

明日は日曜でございます。

此品を差上げます。

此品差上候。

入學試験は二十八日でございます。驚入ります。追懐する情にたへ

之も櫻でありますか。

之も櫻に候や。候か。

ませぬ。

行きませぬ。

行き申さず候(参り申さず候。)

差出ませぬ。

六十歳に達しました。

六十歳に相達し候。

蕃人も皇恩に浴するやうになりました。

御送りませう。

御送り致すべく

御伴ませう。總督府で出版になりました。

有り難う思ひます。

候。  
有り難く存候。(存  
じ奉り候)

天気で御座りまし  
たなら。

天氣に候。(御座候)  
はゞ

日曜日でござりま  
すから。

日曜日に候(御座  
候)へば。

暖くなりましたが。

暖に相成候處。

缺席しますから。

缺席致すべく候  
間(候に付、候故)

御知らせしませう。

仕合に思ひます。  
よからうと思ひま  
す。

御宅に御出でてご  
ざりましたら。  
行きましたなら。

宅に居りますから。  
行きますから。

御承知の通りでご  
ざりますが。

郵便で差出します  
から。

御入學でござりま  
すさうな。

御入學の由。(の趣)

粗末なる品ではあ  
りますけれども。

粗末なる品には  
候。(御座候)へごも

用事があります。

用事之あり候。

今から楽しんで居り  
ますから。

御入營でござりま  
すさうな。

今は菜の花盛りで  
ござりますさうな。

餘り旅行はしませ  
ぬけれども。

平野は少くありま  
すけれども。

準備の都合もあり  
ますから。

流氷の流れくるこ

暇がありません。

暇之なく候。(御座なく候)

ともあります。

御變りもありません。

ぬか。

御差支がありません。

んだなら。

参拜したいと思ひます。

御招待したいと思ひます。

御招待致度と存候。

御供したいと思ひます。

御覽下されたうござります。

御参列して下さい。

御参列下され(成下され)度候。

御貸し下されたうござります。

たうござります。

ござります。

第三節 練習

第一課 普通文

左の文句を文語に改めよ。

一、今日では、どんな品物を製造するにも、分業法に依らないことはほとんどない。

二、笠置が落ちたそうなどいふ風聞があつたから、義兵を擧げずにやんだ。

三、雲かを見ると島である。

四、奈良の大佛を見るものは、誰でもその大きなのに驚かぬものはない。

五、古風の牛車は、博物館に行かぬと見ることが出来ぬ。

六、昔は汽車汽船のやうな便利な交通機關は、一つもなかつたのである。

七、一日に三十里走つても、尙平然として居るといふことである。

八、一家が和合せぬ時は、笑聲が戸からもれることはなからう。

九、謹嚴であらねばならぬ時に、笑ふのはよろしくない。

十、一同が聲を揃へて呼んだが、何の答もなうて、たゞ谷川の水の音が遠く聞えるばかりであつた。

十一、夏は胃の弱り易い時であるから、消化し易い食物を取るがよい。

十二、毎日同じ食物を用ひると、身體の爲にもよくない。

十三、若し過があつたならば、再び其過をせぬであらうといふことをちかひなさい。

十四、かゞり火をたくのは、鮎を集めやうとするが爲である

ばかりでなく、又鵜をはげます一法である。

十五、農夫が田畑を耕すに似てをるではないか。

十六、供給に限りのあるものは、一定の價がないというてよい。

十七、町には瓦屋根の家もあるが田舎は大抵葦屋根ばかりである。

十八、親切な人であるから、人々に敬愛せられる。

十九、波は山のやうであるけれども、船人は少しもひるまずして進んで行つた。

二十、この話を聞たならば、誰でも泣かぬものはなからう。

二十一、日日の新聞に出て居る天氣豫報を、讀んだことがあるか。

二十二、大軍を率ゐて來たり攻めたけれども、抜くことがで



きぬ。

二十三、強いこと之に及ぶものあるまい。(強きこと之に如くものあらじ)

二十四、農業をいやしい職業のやふに思ふものがないではない。

二十五、旅順の名は永く世人の忘れぬ所であらう。

二十六、この町の人口は、年々増加する勢があるから、二萬になるのもまた遠くはなからう。

二十七、櫻の花の咲いたのは、遠く之を望むと、ちやうど白雲のたなびいたやうである。

二十八、富んだ者きつと皆樂しいではない。

二十九、印度への航路を開くといふことは一般の希望であつた。

三十、人々は再び、このやうな盛な儀式を見ることはできぬであらうと話し合ふた。

三十一、儉約を守るのは大切であるけれども、義理に外れてまでも費用を惜むのは、賤しまねばならぬ事である。

三十二、人々が彼を助けることがなかつたなら、もはや死んだであらう。

三十三、法律案は天皇の裁可を経ぬと、其効力を生ぜぬのである。

三十四、鐵は堅いものであるけれども、鐵ばかりが堅いものと思つてはならぬ。

三十五、どれほど技藝ができて忠節の心が少しもなくつては、其の人は精神のない人形である。

第二課 書簡文

左の文句を候文に直せ。

- 一、あなたの方でははや櫻の花盛りであるさうでござります。
- 二、今日では木材から紙をこしらへて居ります。
- 三、お出でを願ひましたならば誠に光榮の至りでござります。
- 四、石炭層は各所にありますけれどもまだ採掘にかゝられることにはなつて居りませぬ。
- 五、危険な所へは行きませぬで決して心配して下さいませぬ。
- 六、暇があつたなら遊びに来て下さいませ。
- 七、不出来ではござりますがやう／＼でございましたから御目にかけてませう。

- 八、御一所につれて下さることはできませんまいか。
- 九、御歸りになりましたら定めし面白い御話もござりませうとは思ひますけれどもとにかく今はさぞおさむしうござりませう。
- 十、御別れしましてからまだ一年にもなりませんねがはや十年もすんだやうな心地がします。

## 第二章 普通文

### 第一節 普通文の種類

普通の文章は、その思想の状態上、之を記事文、敘事文、解説文、議論文の四種に分つことあり。

記事文とは、天地間の事物を、畫にて見るが如くに記する文にて、「春の景色」「夏の海邊」の如きは是なり。

敘事文とは、時間の前後を明かにして、續ける事實、及び變化ある行動を述ぶる文にして、徳川家康「韓國併合」の如きは是なり。

解説文とは、事物の道理を解釋し、又は、説明する文にして、我國體「汽車」の如きは是なり。

議論文は、事物の善惡、得失、有無、眞偽などを證明、斷定する文にして、勉強の必要の如きは是なり。

實際の文章は、單に右の四種の一なるは少くして、互に混じ居るものなり、かゝる時はその主要なる思想の組立によりて分類するなり。

### 第二節 普通文の組立法

書簡文には、一定の形式ありて、その組立法も殆一定の制限あれども、普通文に於ては、一定の制限なければ、其組方につ

きては、次に示すが如き注意をするのみにて可なり。

文章の組立の順序を整ふる仕方としては、次の三部に分ちて工夫すべし。

起首 一篇の頭となる部分にして、讀む人の注意を引く

如く工夫すべし、この工夫に二種あり。

一、先づ本題に入る端緒をひらきて、人をして之より如何に書き行かるとかを想像せしむ。

二、先づ一篇の要旨をあげて、人をしてその詳細如何を想像せしむ。

中要 一篇の主部となる所なり。

結尾 一篇の結びとなる部分なり。この工夫にも次の二種あり。

一、既に述べ來れる所に關係して、更に添へ加ふるも

の。

二、既に述べ來れる所を總括するもの。

第三節 普通文の作例 春の景色

首起 四方の山々は霞たなびき、吹く風も長閑に、桃櫻の花は、雲の下りたるが如く、柳の枝は、恰も緑の絲を垂れたるが如し。

中 田畑を眺むれば、農夫は牛馬を使役して耕作し、黄金の菜の花は、青々たる麥と入り亂れて、毛氈を敷けるかと疑はる。

要 遙か彼處の日當りよき堤には、一團二團の子供の群の、すみれたんぽを摘むも見え、此處の丘には節面白き唱歌の聲も聞ゆ。

尾結 實に、春は年中の最も楽しき時節なり。

櫻

首起

百花咲き亂る、春の野山に、一際目だつは櫻花なり。その姿の氣高き、其香のゆかしき、とく咲きて心よく散る、其潔きこと、他の花には又と見ることを得ず。

中

されば、古より歌によまれ、詩に作られ、或は文章に書かれて、花の眞價は益々あらはる。敷島の「大和心を人間はば、朝日に匂ふ山櫻花」の歌にては、高潔なる大和魂に比べられ、花は櫻木人は武士の諺にては、武士の本分をいひあらはせるにあらずや。

尾結

今や、櫻花は野に山に、雪の如く霞の如く、春の空を彩り、其の清き心と、ゆかしき香とは、共に我等の鑑とすべきなり。

櫻花

首起

櫻花は春の中ば頃一整に咲き揃ひてまた潔く散る一重なるもあり八重なるもありて花の盛なるとき遠方より之を眺むれば恰も白雲かと疑はれ其眺望甚よし。されば古より歌に詠まれ詩に作られ或は文章に書かれて百花の王とさへ賞せらる彼の「敷島の和心を人間は朝日に匂ふ山櫻花」の歌にては高潔なる日本魂に比べられ花は櫻木人は武士の諺にては武士の本分を諭せるなり。

中

尾結

あゝ野に山にこの花なかりせばいかに春は淋しからん實に櫻は百花の王といふべし。

柳

首起

春なほ肌寒き庭の面に、そよ／＼と吹く春風のまゝに、ゆらく／＼うち靡けるは、垂れ柳なり。

中

その糸のゆかしき、恰も人を招けるが如くにて、やさしく愛らしき状は、他の木にはまたと見ることを得ず。されば古より朔風に氣高さを誇れる梅花、暖き霞の春には、はなやかさを争ふ櫻花等ともに、或は歌に詠まれ、或は詩に作られ、或は文章に書かれて、賞揚せらるなり。古人の句に、「むつとしてかへれば門の柳かな」とは、よく其本性をいひあちはせるにあらずや。あゝ、この垂れ柳の、春風のまゝなる、従順の心と、やさしさとは、我等女子たるものゝ、一日も忘るべからざることにこそ。

尾結

吉野山

首起

吉野山は、奈良縣の中央吉野川の南岸にありて、櫻花の名所なり。

中

要

山中には、南朝の遺跡及後醍醐天皇の御陵等ありて、花時に至れば來り訪ふ人多し。口の千本といふは、村上義光の墓のほとりにして、それより進めば中の千本、奥の千本等あり、此外尙至る所、櫻樹あらざるはなく、麓より咲き初めし花は、次第に山丘に及び、麓の花の盛りすぎて、奥の花の盛りとなるまでは、殆一月にわたるといふ。正平の昔、楠木正行が、決死の士百四十三名の名字を、壁に書きつらね、

かへらじとかねて思へばあづさ弓、  
なき數にいる名をぞとどむる。

といへる一首の和歌を、書き残したる如意輪寺は、山腹にあり。

尾結

首起

中

藏王堂の東なる、吉水神社は、  
花にねてよしや吉野の吉水の、  
まくらのもとに石走る音、  
の御製を残し給ひし所なり。  
塔の尾の陵は小高き所にあり、一拜して其かみを思ひ奉ればそぞろに涙を催さる。  
古人の句に、

夏の海邊

歌書よりも軍書にかなし吉野山。  
水や空、空や水なる大海原の、夏の日ほど心地よきものは、またとあらじ。  
親しき友と、手を取り波をけだて、水に入る愉快さ、やがて、水泳にもうみ、岸に上りて、松の木蔭に腰を下せば、

要

涼しき風は、水面より來りて、暑さを忘れしむ。日もやうやく、西にかたむく頃となれば、彼方此方より、むらくと立ちのぼる、夏雲の景色も亦興あり。

尾結

夕映に美しかりし海、いつしか暗くなり行けば、月は水面より上り、金波銀波の眺め亦なく美し。

秋の野

首起

残れる暑さ、やうやく去りて、吹く風涼しき頃となりてより、秋も早や半となりぬ。

中

見渡す限りの稻田は、吹き渡るそよ風に、黄金の波を打ち、群雀の、鳴子の音にばつと飛び立つ様も、面白し、空よく晴れ渡り、をちこちの山に紅葉の色づけるも道のべのすゞきの風になびくも、川べの野菊のかけを水にうつすも、此頃なり。又此方彼方に、齒のぬけたるが如

要

く見ゆるは、早稻田の早刈り取られたるなり。幾多の人々は、遠近に點々として、蟻の如く動き、刈るもあり、束ぬるもあり、運ぶもあり、扱くもあり。

尾結

今や農家收穫の眞最中にて、其勞の程も思ひやらる。

徳川家康

首起

徳川家康は三河の人なり。

中

幼き時より、思慮深く、幼遊びにも他の兒童にことなれり。彼の阿部川の石合戦を見し時の如きも、従僕をして驚嘆せしめしことあり。

要

當時、天下麻の如く亂れ、群雄は諸方に割據して、互に戦ひ、人々安堵の思ひもあらざりき。家康人となるに及び、これらの群雄を統べて、天下を定め、江戸に幕府を開きて政事を行ひ、徳川氏三百年の基を開けり。

尾結 實に家康の如きは、天下の英雄といふべきなり。

兒島高德

首起 兒島高德は、備前國兒島の武士にして、南朝に仕へて功勞多かりし忠臣なり。

後醍醐天皇の笠置にのがれ給ひし時、早くも義兵を擧げしが、期未だ到らざりけん、事終にならざりき。後、帝の隱岐に遷させられ給ふ由をきくや、乃ち一族を集めて、諭して曰く、「志士仁人は生を求めて、仁を害することなし、身を殺して仁をなすことあり。とかや、義を見てせざるは勇なきなり、いでや臨幸の路次に參り會ひ、君を奪ひ奉りて義軍を起し、たとひ屍を戰場にさらすとも、名を子孫に傳ふべし。」と或は舟坂山にかくれ、或は杉坂に待ち奉りし辛苦は、水泡と消えしも、少しもひる

要 中

尾結 實に高德の如きは、千古の忠臣といふべきなり。

韓國併合 (明治四十三年九月ノ稿)

首起 今茲八月二十九日の詔書により、韓半島の地域は、赤色と塗り換へらる。

今上陛下の御稜威は、炳として日星の如く、國運發展の趨勢は、潮の湧くが如し。前には日清の役の結果、南臺灣に版圖を擴め、近く日露の役に際しては、北樺太の南半を併せ、今復た茲に韓國の併合を全くす、誰か慶せざるものあらんや。日韓古來の關係は、昔神功皇后の三韓征伐ありてより、七百有餘年間、我屬國として朝貢を絶



中 要

たず、孝徳帝の朝、彼終に我手をはなると雖、豊太閤の明大陸に兵を進むるの途次、我威武に震駭し、降つて明治維新の際、朝鮮の無禮事件起り、征韓論となりしと雖、時未だ至らざりき。

然るに其後韓土は常に禍亂の源となりて、或は日清の役となり、或は日露の役となりしかば、我國よりは、統監を置きて、この國を保護するに至りしも、全くその禍源をたつこと能はざりしを以て、遂に東洋平和のため、韓國は我大日本帝國に併合することとなり、彼等は我陛下の臣民となれり。

回顧すれば、彼等が祖先が、我國の文明上に與へし利益は、決して少からざりき、我國今日の隆盛と、光輝ある歴史の一斑は、確かに彼等の中に認めざるべからず。

結

尾

時去り時來りて、茲に一千年、吾人は彼等と同胞となり。今日より彼等を指導して、文明の恩澤を浴せしむるは、吾人の任なり、豈戒心せざるべけんや。

京都市

首起

京都は山城の國にありて、桓武天皇以來一千百有餘年の間、皇居のありし地なり。

この地三方山にてかこみ、鴨川の水清く市街を通じて流れ、風景の美なること、他に其のたくひを見ず。

春は嵐山に櫻を見、夏は鴨川に暑さを流れ、秋は高雄の紅葉をたづね、冬は圓山に雪をながむるなど、四時の眺め一として備はらざるはなし。

中

加茂、北野、八坂、護王、平安などの神社、東西本願寺、泉涌寺、智恩院、南禪寺、仁和寺などの寺院、市の内外にありて、參

要

詣の人常に絶えず。

商業は、東京大阪に及ばざれども、工業は盛にして、西陣織、友禪染、清水焼は、其名最あらはれ、其他蒔繪、紅、白粉、針等を造ること他にすぐれて巧なり。

我が國體

首起

神武天皇一たび、仁義の軍をひきゐて、此國を治め、大和の國、橿原の宮にて、皇位につき給へり。

要中

是より二千五百七十年、其間皇統一系かはることなく、代々の天皇は、臣民をいつくしみ給ふ御心深く、臣民は又義勇公に奉ずる心あつし。されば、今まで一たびも他國のあなどりを受けしことなく、日に月に其國光を輝かし來れり。是れ實に我國の美風にして、世界萬國中、他に其比を見ざる所なり。

尾結

かゝるよき國に生れたる我等は、各其業をはげみて、國を富まし、兵を強くして、此たふとき國體を損することなく、永遠に傳ふべきなり。

汽車

首起

汽車は、英人シ・ウジスナブソンが、鐵瓶の湯氣の蓋を上ぐるを見て、蒸氣力の強きことを發見し、之を基として工夫をめぐらして考へ出せしものにして、其後漸次改良を加へられ、速度の如きも今は一時間七十五哩以上を走るに至れり。

要中

汽車は、交通運輸の便を社會に與へ、文明の助をなすものなり。昔は、僅の荷物を近き所に運ぶにも、荷車等によりて人馬の力をかり、多大の時間と、勞力とを要したりしが、今はこの汽車のために、敏速に目的を達し、又は數

百里の道を行くにも、安樂にして、僅少の賃錢にて旅行し得るは、實に汽車の賜なり。  
 我等は斯くの如き便利なる機關が、四通八達せる時代に、生れ合ひしは誠に幸福なり。

運動の必要

如何なる事業をなすにも、先づ第一に必要なるは身體の健康なり。

身體強壯ならざれば、何事もなし遂ぐることを得ざるのみならず、假令數多の年月の間生き長らふとも、一日も愉快に暮すこと能はざるべし。諺にも健全なる精神は、健康なる身體に宿るといへるが如く、身體にして健康ならざれば、精神も自然に不活潑に流れ、何事も成し遂げ得ざるべし。

中 要

結 尾

されば此大切なる身體を、強壯に保たんには、常に適度の運動をなすべし。若し人として運動を怠らば、身體は次第に衰へ、精神も惰けて、何事も成就する事を得ざるのみならず、惜むべき一生を、不快に過さざるべからざるに至るべし。

勉強の必要

世には學問に勉むるをのみ、勉強の如く心得る人、少なからず、之れ大なる誤りなり。如何なる業務を問はず、そのなすべき事に全力を注ぐこそ、勉強なれ。

諺にも「勉強は幸福の母」といへる如く、何事を成し遂ぐるにも、勉強せざば成功することなかるべし、何の勉むることもなくして、良果を修めんとするは、恰も木によりて魚を求むるが如く、其結果は失望に終らんのみ。

尾結 人は幼少の時より、この習慣を作り成長の後は一意其業務に従事する様心掛けざるべからず。

師の恩

首起 未だ東西をも知らざる頑是なき、我を教へ導き給ひ、雨の朝風の日にも、或は教へ或は勞はり給ひしは我師なり。

中 古より三尺去つて、師の影を踏まず、とかや。如何で尊き此恩を忘るべけんや。嗚呼、思へば高し、吾が師の恩今や海山遠く隔りて、其溫容に接すべからずと雖も、其面影はさながら眼前にあり。

尾結 我は終生、其教へ給ひし道と、其面影とを忘れずして、其恩に報いんと欲するなり。

父母の恩

首起 我を生み、我を育て給ひしは、我が父母なり、我につきて、一日片時も忘れ給はざるも亦我が父母なり。

中 人の子を思ふ程、切なるものは他にあらざるべし。古歌に、「子を思ふ心はやみにあらねども」と詠まれたり、實にさることなるべし。

要 されば、人の子たるものは、常によく父母の命に従ひ、孝養をつくすことを忘るべからず。

尾結 鶴には三枝の禮あり、鳥に反哺の孝ありとか、鳥獸且つ父母の恩を知る、況して人に於てをや。

我が家

首起 我家は、前は稍廣き小路に沿ひ、後はさゝやかなる竹藪をひかへ、納屋一つ、土藏一つ、母屋の傍に立ちて、日あたりよき所なり。

要中

家には、父母兄弟合せて六人あり、皆よく長上を敬ひ其命にさからふものなく其仕事を手傳ひ、兄弟は中よくあらそひなどおこることなし。

尾結

昔より笑ふ門には福來るといふ言葉もあれば家内のものはむつまじく暮し一家の幸福をますことを務め居れり。

第三章 書簡文

第一節 總説

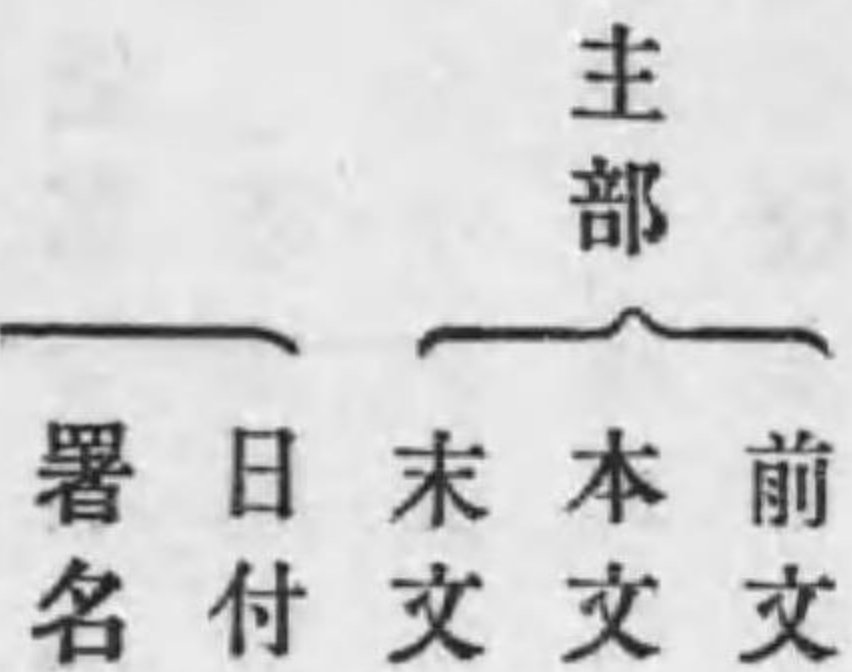
書簡文は手紙の文のことにして、發信者(手紙を出す人)と受信者(手紙を受取る人)と出會ひて、談話をする事出來ざる場合に、その談話の代りに用ひられて、二人の間の意志を通ずることを計る用をなすものなり。従ひて相手は一人か、又

は一人と見なし得る一團體なり。之普通文と大なる差異ある所なり、故に書簡文を認むるには常に此所によく心をおかざるべからず。

書簡文として今日最廣く行はるゝ文體は、所謂候文にして古來一種の體裁をなせり。よりて之よりその種類及び其作法につきて述べん。

第二節 書簡文の形式

書簡文は之を組立上よりいへば、左の各部よりなる。



餘部 名宛

協付 進書

主部の中、前文は前の挨拶の語にして、例へば「拜啓此頃は寒さ誠に厳しく相成候處御壯健にて御勉強なされ候か御伺申上候私事は幸に無事にて勉強致居候間御安心下され度候」との如きものなり。

本文はすなはち用事を述ぶる所にして、通常前文の次に「扱」陳ぶれば「などの語を以て續く。

末文は後の挨拶の語にして、例へば「先は御病氣御見舞まで」「いづれ御目にかゝりよろづ申上べく候」「御一同様にもよろしく御傳への程願上候」「時節柄御大切になさるゝ様祈上候」等の句に「敬具」「拜具」「敬白」「草々」等の結尾の語をそへた

るものなり。

正式の手紙には、以上の各部を備ふれども、相手により、事柄によりては前文の一部を畧し、又は全く之を省き、又は末文を結尾の語のみとすること多し。餘部につきてはこゝに用なきを以て省く。

第三節 書簡文の用語

一、前文の起筆に用ふる語。

拜啓。 謹啓。 一筆申上候。 手紙を以て申上候。

前畧御免下され度候。 前畧(前文を畧する時)

拜復。 御手紙拜見仕り候(返事の時)

二、時候を述ふるに用ふる語。

春 春暖の候。 餘寒去り難く候處。

春めきて四方の山々も笑みそめ候處。

時節柄追々暖かに相成候處。

夏 向暑の候。暑さはげしく候處。

炎暑堪へ難く候處。酷暑の候。

秋 残暑堪へ兼ね候處。秋冷の候。朝夕は凌ぎ易く相成候處。

冬 向寒の節。寒さ日々に増し候處。嚴寒の候。

寒氣烈しく候處。

三、起居に用ふる語。

益々。彌々。御機嫌克く御起居遊され候や。

御健勝。御壯健。御すこやか。無事

四、末文に用ふる語。

餘は參堂の上申上べく候。何れ御目にかゝり申上べく候。委しき事は拜顔の上申上べく候。折返

し御返事に預り度候。末筆ながら御兩親様にも宜しく申述べられ度候。

敬白。敬具。拜具。謹言。かしこ。草々。あらく。

五、稱呼に用ふる語。

1、自分のこと

目の上の者に對しては私。父母に對しては名を云ふことあり

弟妹に對しては私。自分。

友人間にては私。小生。僕。

2、相手の人のこと

目上の人に對しては御父上様。御母上様(父母)

御兄上様。御姉上様(兄姉)。先生。師の君(師教)

弟妹に對しては御身。そなた。

友人間には貴兄。貴君。君。御許様。

3、他人に對して

自分の父(母)兄(姉)は || || 兩親。 父母。 父。 私父。 老父。 私兄。 家兄。

他人の父母兄弟は || || 御兩親様。 御親父様。 御尊父様。 御父君。 御母堂様。

御兄上様。 御兄君。 御令兄様。 御令弟様。 御弟御様。

自分の弟(妹)は || || 弟。 私弟。 愚弟。 舍弟。

4、居宅

自分の宅 || || 私宅。 宅。 拙宅。 私方。 當方。 弊店。

他人の宅 || || 御宅。 貴家。 高堂。 御住宅。 御住居。

貴店。

5、住地

自分の住地 || || 當地。 本郡。 當市等

他人の住地 || || 御地。 貴郡。 貴市等

第四節 書簡文の種類及び作例

一 祝賀の文

祝賀の文は始に祝賀すべき事柄をのべ次に祝の詞を書くべし。而して常に嚴正の詞にて書き、禮を失はざる様にすべし。

友の入學試験に合格せしを祝ふ文

拜啓本日山川君より承り候へば君には此度第一中學校入學試験に合格なされ候由目出度存じ候平素の御志望も達することを得られ候て定めし御満足の事と存じ候以後は益御勉學なされ優等の成績を以て御卒業なさるゝ様今より御待ち申上候諺にも油斷は大敵と申すことも之あり候へばよく、御注意なされ精々御勉強せられんことを切



に希望致し候 敬具

卒業を祝ふ文

此度の試験は殊に御できばへよろしく目出度御卒業遊され候由日頃たゆみなく御勉強なされ候ひし印と深く感じ入り御祝申上候御兩親様には定めし御悦の事と御察し申上候操行學力ともに優等にて賞品まで得させ候御面目誠にうらやましく存じ候私事は本年漸く入學試験に合格仕り候何卒これまでの通り御教示のほど願上候先は右御祝申上候 かしこ

練習文題

病氣全快を祝ふ文

賞品を授けられたる友を祝ふ文

二 慰問の文

慰問の文には時候見舞の文あり、失意の人を慰むる文あり、又病氣及び水害、火事等の災害にかゝれるものを見舞ふ文あり。

入學試験に不合格になりし友を慰む

拜啓貴兄には此度の中學校入學試験成績や、不良の爲に御失敗なされ候由實に驚入り候平素より御勉強なされ候ひし貴兄にして此事ありしは如何なる故に候か私事の考ふるに試験は半ば時の運にして合格せし者必しも優等者にあらず不合格となりし者必しも劣等者には之なく候へば之が爲に痛く心を勞するは却りて自ら悔る者に候殊に古來の英雄の傳記を讀めば随分失敗の事柄も之あり候さてこそ失敗は成功の基とも申し候此度の事の如きもとより有り勝ちの事にして決して恥とすべき程の事にも之な

く候へば其が爲に志を變ぜらるゝ事なく一層の御勉強を  
續けられん事を希望致候 敬具

病氣見舞の文

一筆申上候今日學校にて春山様より承り候へばあなた様  
には二三日前より御病氣にて居らせられ候由御容體は如  
何に候や御伺申上候學年末前の事に候へばさぞ御心配の  
事と存じ候へども平生よりよき御成績に居らせられ候へ  
ば少し位御缺席なされ候とも何程の事もあるまじく候あ  
まり御心配なされ候はゞ御病氣の御爲にあしくも候はん  
と存じ候間學校の事などしばらく御忘れなされひとへに  
御養生なされ度候この雜誌めづらしくは御座なく候へど  
も御慰みにもと存じ御覽に入れ候 かしこ

練習文題

留守する友を見舞ふ文

寒中見舞の文

三 勧誘の文

散歩集會などに人を誘ふなどは、この類の文にして、之には  
時日、場所、目的など明に記入すべく、且相手をして同行の念  
を起さしむる様目的物の勝景、快樂、効能などを詳しく記す  
べし

遠足に友を誘ふ文

取急ぎ一筆申上候明日は幸ひ日曜日につき好天氣に候は  
ば何々山へ遠足試み度同級生某君も同行致さるべく候故  
貴兄にもさしたる御用も之なく候はゞ午前八時までには私  
方へ御立寄り下され度候尤も當日の支度は鞋脚袴腰辨當  
に候間之また御承知下され度候 草々

義捐金を勧むる文

拜啓此度の何地方の火事は實に同地未曾有の天災にて數十人の死傷者も之れ有り辛うじて死を逃れ候ものも着るに衣なく食するに米なき有様に候由人生の悲惨之に過ぐる者あらじと存じ候就ては各地の慈善家は多數の金品を義捐する中に某小學校の生徒なども幾分の金を出し居り候由新聞に相見え候につき我校生徒間にても多少に拘らず義捐致し度心組に候間貴兄にも御賛同なし下され度何分よろしく御願申上候 敬白

練習文題

共進會觀覽に誘ふ文

雑誌の講讀を勧むる文

四 問合せの文

自己の知らざること又疑問として居ることを他人に問ひ合すには、其要件を明瞭にかき、同時に先方へ骨折をかくることを謝し、丁寧なる詞を用ふべし。

入學の手續を問合す文

一筆申上候日々寒さはげしく候ところ御變りもなく御勉強なされ候由御目出度存じ候さて私事本年三月には尋常小學校卒業致すべく候につき父母の許可を得て御校へ入學致度と存じ居候就ては入學試験程度は如何に候か御聞かせ下され度願上候尙御校規則書及び一箇月の學費何程を要すべく候や御手数ほどの恐れ入り候へども何卒御暇の時に御知らせ下され度よろしく御頼み申上候かしこ  
雇人の有無を問合す文

一筆申上候此頃病人之あり無人にて手廻り兼ね困り居候

御宅の附近に誰か相當の雇女は之なく候や實は親戚の者  
二三日前まで依頼し居り候處據なき都合にて家元へ歸り  
候故一層不便を感じ困難致し居候次第に候何卒御心當御  
座候はゞ至急御世話なし下され度御願申上候 草々

練習文題

友人の住所を問合す文

物品の有無を問合す文

五 招待の文

人を客として招くには、丁寧なる詞を用ひ、招く事由、招く場  
所、招く日時、三件を明瞭に書き尙馳走の十分ならざるこ  
と、又は遠來の勞を謝すること、又は御返事を待つことなど  
に及ぶべし。

開店披露に人を招く文

拜啓かねて御話申上候通り彌々本日より雜貨店を開く事  
と相成候正直と勉強とを第一として有らん限りの力を盡  
す積りに候何分未熟の身にて且未だ花客も之なく候へば  
何卒一層の御愛顧に預り度幾重にも願上候就ては開店披  
露の印に明後廿五日午後四時より本町新玉亭にて小宴相  
開き粗餐さし上度候間御多用の際恐入り候へども御光來  
下され度此段御案内申上候 敬白

誕生日に友を招く文

拜啓明日は小生の誕生日に相當り候につき聊内祝を催す  
べく候別に何の設も御座なく候へども午後三時頃より御  
光來下され度尙某君にも御入來を請ふ筈に候へば是非萬  
事御繰合せ御弟様御同伴にて御出かけ下され度右御案内  
申上候 草々

練習文題

病氣全快祝に友を招く文

法會に人を招く文

六 贈送の文

物を贈るには贈るべき品名、個數を明記し、之に「輕少ながら」「粗末ながら」「不出來には候へども」等の語を添へて「御受納下され度」「御笑納(食物ならば御笑味)下され度」などの語にて結ぶことは普通なり。

土産物を送る文

前畧父事先頃より北海道地方旅行致し居候處昨日無事歸宅仕候その節持歸り候鹽引鮭一尾差上げ候之は彼の地にて十分吟味致し候由に候へども私方にて未だ味ひ申さず候へばよしあしの程如何あるべくや御風味下され度候

草々

梅花を贈る文

一筆申上候餘寒も日一日とうすらぎ凌ぎやすく相成候後園なる垣根の梅日當りよき枝は早咲きそめ居候につき一枝手折りて御目にかけて申候明らかなる窓清らかなる御文机のあたりに挿み給はゞ心なき花も春にさきがけしたる甲斐あるを喜ぶならんと存じ候 かしこ

練習文題

依頼を受けて買ひたる書物を送る文

東京へ奉公に行く友に送る文

七 依頼文

物事を依頼するには、丁寧なる詞を以てすべきは勿論のことにして頼むべき事柄は、最も精細に記すべきなり。

仕立物を頼む文

取り急ぎ候へば、用事のみ申上候親類の娘近日嫁入致す事と相成候とて衣服二三枚仕立方を頼まれ昨日より手がけ居候へども只頃絲針の道に拙く候故はかゆき申さず先方よりは度々催促せられ殆困り居り候へば甚申上かね候へども一枚御助け下さるまじきや御聞きとゞけ下され候はば誠にうれしう存じ候先は右御都合御伺まで

手傳を頼む文

明後日は亡父の一回忌に相當り候につき生前御親しく申上げ候御方々を御招き致す筈に候處萬事物なれてよく働きくれ候例の下女は折から病氣にて里にかへし候事とて誠に困り居り候御宅にてもそれ〱御用もあらせらるべきを申上兼候へども何卒御さし繰り梅どのに手傳願はれ

まじくや明後一日とも申さず半日にてもよろしく候御心安きに任せ右様の事ども願上候が御聞届け下され候はゞ此上もなき仕合せに御座候 かしこ

練習文題

買物を頼む文

綴方の添削を頼む文

八 報知の文

物事を報知、通告するは、その目的先方に、事柄を判明ならしむるにあるを以て事柄を明瞭にかくことにつとむべきなり。

入學試験に合格せし事を報ずる文

拜啓入學試験の様子は先日申上げ候ひし如くにて非常に心配致し居候ところ幸ひにも合格することを得申候間何

卒御安心下され度候之全く先生が多年御教訓なし下され候御蔭によること、存じ厚く御禮申上げ候此上は尙一層勉強仕り御高恩の萬一に報い申すべく候時節柄御身偏に御大切に遊され度祈奉候 謹言

病氣全快を報ずる文

拜啓小生病氣中は度々御見舞下され有難く御禮申上候御蔭にて昨今は追々快方に赴き庭前の散歩も致さるゝ位に相成候間御安心下され度候此度の病氣については實に一方ならぬ御心配を掛け何とも申上様なき次第に御座候何れこゝ兩三日の中には參堂御禮申上べくとは存じ候へども取敢へず御知らせ旁御禮申上候 敬具

練習文題

入學試験の模様を舊師に報ずる文

女學校に入學せしことを遠方にある伯母に知らす文

九 謝禮の文

他人の世話親切厚意に對しては、丁寧なる禮の詞を用ひざるべからず、されど丁寧ならんとて、へつらふが如き詞を用ふるはよろしからず。

土産物を貰ひし禮狀

御父上様先頃より御旅行の由は承り居り御留守見舞旁參上致すべきの處用事に取り紛れ存外の御無沙汰仕候こと御ゆるし下され度候昨日御無事にて御歸宅遊され候由御目出度存じ候其節御持ち歸りなされ珍らかなる御品下され御厚意の程有難く存じ候同じ物は當地にても見當り候へども頂戴致し候品は格別にてたやすく口に上せ難くとて家内一同喜び居り候何れ御目にかゝり候上御禮申上べ

く候へども取りあへず御禮まで かしこ

馳走にあづかりし禮狀

昨日は久々にて御様子伺ひ度と參上致候處はからずも厚  
き御もてなしの上に御珍しき御物語を伺ひ候て思はず夜  
に入候迄御妨げ仕り候のみならず歸宅の節は御送りまで  
煩し誠に御禮の申し上げやうもこれなく候御母君へは御  
許様よりよろしく申され度此品輕少なから到來致し候も  
の故御目につかけ申候御受納下され度先は取りあへず御禮  
まで

練習文題

書物を借りたる禮狀

舊師の恩を謝する文

十 雜

傳言を云ひやる文

昨日少々用事之あり山田様へ參り立ち寄り候節同家御老  
人様より先日御姉様に願置き候仕立物明後日用ひ度候に  
つき御急がせ申候て恐入り候へどもなるべく早く御仕立  
明日正午までに御遣し下され候やう傳へくれよとの事に  
候間參上仕り此由申上べくと存じ候處途中雨模様之あり  
候ていそぎ歸宅致し候間延引ながら手紙にて御傳言の趣  
申上候 敬具

書物の返却を催促する文

手紙を以て申上候先日御用立申上候何々の書物少々取調  
へ度事俄に生じ候につき最早御覽濟に御座候はゞ、一先御  
返却下され度候若一御入用に御座候はゞ必要の個所を取  
調べの上折返し御用立申上ぐべく候間左様御承知下され



度候 草々

吉野行より歸りて友に遣す文

拜啓豫て御話申上候通り去一日は父に伴はれて吉野の名所舊蹟をたづね昨夕無事歸宅仕り候同地の櫻樹書物にて読み師の君より話されし事とて大凡想像は致し居候へども花の吉野山を目前に見たる時の光景は又一入に候これはいく／＼とばかりの古人の句も眞をうがち居り候全山櫻樹到る處に之あり候へども口中奥の干本は殊に見事に候この山はかく見事なる花の雲にて包まれ満目總べて花に御座候へども私共の如き聊ながら歴史の一端を學びし身には只の花の名所とのみは見申さず候藏王堂吉水神社如意輪寺一として昔を忍ぶ種とならざるはなく特に御醍醐天皇の御陵を拜してはそゞろに涙わき出で申候彼の歌書よ

りも軍書にかなし吉野山の古句實に我が言葉に候別封彼地にて求め候繪はがき一組吉野行の紀念として御目にかへ申すべく何れ一度參上仕りゆるりと御話申上べく候へども取敢へず概略申上候 敬具

### 第三編 第一編ノ答解

#### 第一課

一、蠶卵紙。

繪。

勸工場。

甲板。

鶴。

駝鳥。

鍋。

爆發。

釘。

麻。

二、1、天顔。

殊に。

天子の御顔がかくべつに美しくご

(御氣色がかくべつにすぐれて居ら

2、大きな岩のやうな重いものでも、しまひにはうつし動かすことができる。

3、前古。

其式の盛であつたことは、以前に例がなかつた。

4、白蓮の巻葉。

にこり水の中より出て居ても、其にこりの色にしまずして、美しい花さく白蓮の巻葉をつゆがこぼれおちるさまはすゞしい。

5、此地は、四方八方へ通ずるかんじんな路にあたる。

三、そら晴れてのどかな天氣。

神社のさまなどに古びてすこいやうなこと。

つとめること。 知らぬ所を色々たまよひ尋ね行く

路。 昔部下の乗馬を集めてしらべること。 おと

ろへちゞむること。 手足がぐたく／＼になること。

松の色が榮えて見ゆること。 たふとびうやまふこ

と。 おそれ多い又はもつたいない。

四、平假名は音片假名は訓とす。

通<sup>ツウ</sup> 招<sup>ショウ</sup> 使<sup>シ</sup> 答<sup>コウ</sup> 煙<sup>エン</sup> 降<sup>カウ</sup> 殘<sup>ザン</sup> 賴<sup>ライ</sup> 待<sup>タイ</sup>

第二課

聞<sup>ブン</sup> 授<sup>ジュ</sup>

藥<sup>ヤク</sup> 寫<sup>シヤク</sup>

報<sup>ホウ</sup> 祭<sup>サイ</sup>

一、しんえん(神社ノ)

せんりひん(戦争ニテ)

いつしんふらん(外ノ事ヲ思ハズ其事)

かんびやう(病氣ノ世)

しゆつぱん(船ノ出)

はいたつ(ドケバリト)

かぐら(神事ニ奏ス)

たいきやく(シリゾキ)

ぜんめつ(スツカリ)

しんみつ(シタシイ)

二、朝鮮、寫眞

砂糖、稻刈、練兵場

紺色、淺黄色、占領

停車場、節儉

三、とこしへハ長ク久シイユトデアル。

ワレハ、伊勢ノ大神ニ國民ガイツイツマデモ長ク久シ

砂、沙  
儉、險

キ間、安ラカニ世渡リノデキル様ニト祈ルノデアアル、伊勢ノ大神ヨ、何トゾ我が世ヲ守リ助ケヨ。

四、1、ユダンナスルト事ガアトモドリナシ、又ハ失敗スルユトガデキル故、ユダンハ事ヲ破ル大キナ敵デアアル。

2、人ノ賢愚ヲ見ル毎ニ我身ヲ省ミテ正シク直セ。

3、猿ハ木ニノボリ、枝ヨリ枝ニウツルユト巧ミデアアルガ時ニヨツテハ思ハヌ事ニヨリ木カラ落ナル事ガアル故ニ、ユダンナスルナ。

4、イソグ時ニハ人前ヲモハバカラズマスグニ通り行キタキモマハレトノユドデ、エンリヨスベキユトニイフ。又急グ時ニハ近道ヲシテシクシリ却テ後レルユトアルカラ急グトキニハアワテタルナ、トイフユトニモ用フ

- 5、ワガイタイト思フユトハ他人モイタイ故、同情ノ心ヲモナテ他人ノ好マヌコトハスルナ。
- 6、樂スレバ後ニ苦勞アリ、苦勞スレバ後ハ樂ニナル。
- 7、老人ガユロブ事ノナイ様ニ杖ヲツク如ク、人モ過ヤ失敗セヌウナニ注意セヨ。
- 8、ゴクユマカイ小サイモノデモ、積リ積レバ大キナモノトナル。
- 9、飲食物ヲツ、シマヌト病氣ガ起ル。
- 10、鳥ノ住マヌ所デハカウモリデモ鳥ノ如ク見エル、スナハナ愚ナモノデモ他ニ類ナイ所デハ賢イモノニ見エ  
ルコトニイフ
- 11、井ノ中ニ住ム蛙ハ、ソユヨリ廣イ所ハナイト思フ、狹イ所ニ居テ世ノ中ノコトヲ知ラヌコトニイフ。

第三課

クサナギノツルギ。                   アメノムラクモノツルギ。  
 ヒノカハ。                           エゾ。                   サンシユノジギ。                   タナ。  
 フクシユサウ。                       ヤマタノオロナ。                   カマ。

二、由來

1、**由來**                   ドレ、此ツルギノライレキチカタラウ。

2、名勝

タクサンノ川ノ合ウテ流レルヘンニハ景色ナドニカクベツ名高い地が多い。

3、兵役                   義務

我が國ハ國民ガ皆兵士デアアル、男子ハ皆兵役ニツクツトメガアル。

4、進退                   敏活                   敵狀



とりゐ。 糸糸

ノ雲ガタナピイテ如何ニモ花デハ櫻人デハ武士トイ  
フ諺ガ自然ト思ヒダサレル。

三、 べん。 そろふ。 ふさ。 ちよくし。

りんじ。 とりゐ。 がく。 けいれい。

じうえう。 せいどう。

四、 醬油、 蝶、 縞物、 生糸、 通運、

燈臺、 近衛師團、 砲兵旅團、 聯隊旗、

第五課

一、 義勇奉公。

國家ノ事ニテ死ンダ人々ヲオアハレミ下サル事ガ深  
クテ其上アツイユトヲ見ルモノハ、誰デモ義勇公ニ奉  
ズルノ心ヲ起ス。

2. 關所。 一切。 差止め。 旅客。 宿泊。 賑か。 市街。

關所ハ日暮カラ後ハ皆旅人ノ通ルノチ差止メダカラ、  
旅人ノ宿ニ泊マル者ガ多クテ其ヘンニハニギヤカナ  
マナガアツタ。

3. 御代。 榮え。 浴客。

箱根七湯ハ文明ニナツテユク御代ト一シヨニダンダ  
ンサカエテ、湯ニハイリニクル客ガ一年一年ニフエテ  
クル。

4. 尙

物ノ過ギテシマウタノハマダユキトドカヌ様ナモノ  
デアアル、スベテ物ハ適度デナケレバナラヌ。

二、 だいげんする。(陸海軍ヲスベ) しちようへい。(兵糧彈藥等)

はいでん。(神ヲ拜) ぎよせい。(天子ノオ作り)

めいちゐしん。(明治ノ世トナツテ幕府ガタフ) (レ政權ガ皇室ニモドツタコト)

御製 御歌

樂 らく  
ノシム  
音

罰、罰(誤)

たいしやう (盜賊ノ難ヲサケルタメ隊ヲシテ沙漠ヲユキキスル商人)

しゆくば (街道ノ宿ノアルトコロ) りよてし (旅スル道ノリ)

けいかいしよく (動物ナドガ身ヲ全フスルタメ他トヨク見ワケヲツク體色ヲナスコト)

ほごしよく (動物ナドガ身ヲホゴスルタメニ體色ヲ其住メル周圍ノ物ノ色ニ似セテ居ルコト)

即器 改 劍 盛 孫 勸 勢

樂城 送 境 滅 冷 緑

四、蒸氣機關、新聞紙の廣告、航海中の汽船、

目的を達す、二百米突競走、急行列車に乗る、

賞罰、倒れたる家、

第六課

一、しき。かいだう。とまる。ふんくわざん。

きしやう。らくだ。あしあと。すなけむり。

けいはく。きやうぎ。

二、はつめい (始メテ考ヘ出ス) はつけん (始メテ見付ル) おうよう (ツカヒコナスコト)

ふせいこう (シトゲヌ) こしやう (ワリ)

だいまやう (昔土地人民ヲ私有シ一地方ニ君タリシモノ) うんてん (メグラシ)

かたぐるま (人ヲ肩ニノセテアルクコト) そんがい (ソナフ)

おんし (メグミモノヲイタダク)

三、全快、世話、荷物、保護、旅行、帽子、

農夫、養生、安樂、辛苦、

四、1. 水ノシヅクモ度数ガカサナルト石ニデモ穴ヲアケル

トイフ、ソレデアルカラナホサヲ幾萬年ノ長イ間、コノ

大キナ湖水カラ流レ落ナタ水ノ力ハハカリ知ルコト

ガデキヌ。

2. 瀧 淵

山ヲケヅリ谷ヲホリ、高イ所カラ落ナテハ瀧トナリ、又

快、快

3. 水ノ流ガユルクトドユホツテ淵トナル。  
販<sup>トク</sup>し<sup>トク</sup>さ。 轉<sup>テ</sup>變<sup>ヘ</sup>。

昔チ知ツテ居ル人、モシフルイ道ノ今日ノサビシサト、  
昔ノニギヤカサトナクテ見タラ、世ノカハリノド  
ノクラキニヒドヒカニ驚クデアラフ。

第七課

一、 ふちやく。(ヒツ) あんこくしよく。(マツク)

とつしゆつ。(ツキ) ふけつ。(セイケツ) あくしう。(ワルイ)

りうつう。(ツカヘズ) しうゐ。(リマハ) ほつそく。(シユツ)

めいじやう。(アリサマヲロ) びくわん。(ウツクシ)

トクワイ。 シヤウジ。 アゲハノテフ。 ハチ。

カレハ。 エボシ。 フソク。 牛。

カヒユ。 インド。

發  
起<sup>ハ</sup>發<sup>ハ</sup>出<sup>ハ</sup>  
人<sup>ツ</sup>發<sup>ハ</sup>  
發<sup>ハ</sup>出<sup>ハ</sup>

エボシ

二、

三、1. 互ニ待チドホク氣ヅカヒ居ツタ父ト子トガ。今マメデ

2. 身體、勞、眠る、如く。  
アフタ喜ビハ、ドノクラキデアツタデアラウカ。

3. 飲食、注意、清潔、適度、怠る、寢、罪。  
カラダノ勞チ直スノハ、ヨクネルニユシタモノハナイ。

ノミモノタベモノニ氣チツケテ、カラダノセイケツチ  
タモチヨキ程アヒノ運動チ怠ラズシテ、夜ハ早クヤス  
ミ朝ハ早ク起キテ、新シキ空氣チスヒイツモ日光ニア  
タツテ居テ、ソレデマダ病氣ニカ、ツタナラバユレハ  
我ガ身ノ罪デハナイ。

4. 叛服。  
アル時ハソムイタリアル時ハシダガフタリシテキマ  
ラヌ。



四、煙草、親密、醫者、相談、散步、見舞、  
公園、到着、配達、

第八課

恥、耻(俗)

一、願運、輕最、障終、宿程、増落、餘  
關、恥、初、橋

二、きようきふ、(仕出シテ用ニ) たまみづのおと。(アマガ)  
れんじつのたいう。(毎日毎日) ししやうしや。(死ンダリキズツ)

ていばう(ミツ) けんたい。(ヒキシ) ほそん。(ウシナハヌ)

ふつう。(ナミ) かうかん。(ゴカヘ) ひさん。(トビ)

アフギ

三、アフギ。ムネ。フシアナ。ホ。タウミ。

サミダレ。タイユ。セイリヤウデン。(セイロウデン)

ナヨキンダイシ。ナヨナク。

四、臺所、呼吸、靜、暴風雨、曇、承知、

心配、義務、競馬、勝利、

第九課

一、恩威。蝦夷。皇威。

恩モホドユシ威光モアツテ、進ミ行ク所ニハ敵スル者  
ナク、カネテ強クアツタホドノ蝦夷モ、シマヒニ全ク朝  
廷ノ威光ニシタガフヤウニナツタ。

2. 針金。

眼ノ光ハハヤブサ(鷹ノ類デ眼ガスルドイ)ノ如クスル  
ドク、ヒゲハ針金ノ様ニユハク、カハドユマデモツヨイ。

3. 作物。損害。異状。

田畑ノ作物ニハ、少々ノ損害(ソンジソコナヒ)ガアツタ  
ケレドモ、其外ニハカク別ノカハツタ様子モナク、先ヅ  
フシアハセノ中デノ幸ヒデアルト思ヒ喜ンデ居ル。

作  
{さく|造  
||作  
||法

今  
今(こん) 今(こん) 昨(けつ)  
今(きん) 集(しゅう) 古(こ)

第三編 第一編ノ答解

一六四

4. 今昔(こんせき) 感(かん)

今ト昔トノコトヲ考ヘ、昔ノ事ノ感ジガ起ツテキテオサヘラレヌ。

5. 有無(いうむ)

有ル所ト無イ所ト、ユヅウシタグラ井デアツタ

幣、弊  
扱、吸

二、

漁夫、貨幣、變動、都會、取扱

三、

遊覽、費用、市街、鏡、腐る、

四、

攻(こう) 飲(いん) 給(きよ) 吸(きよ) 散(さん) 裏(うら)  
附(つ) 暗(あん) 快(くわい) 往(わう) 勞(らう) 住(じゅう) 倒(たう) 廣(くわう)  
告(こく) 惡(あく) 由(ゆう) 更(かう) 注(ちゅう) 叛(はん) 住(じゅう) 倒(たう) 廣(くわう)

四、

葬(そう) (死スノ敬語デアツテ皇太子ノ親王及三位以上ノ人ニイフ) 守護(しゆご) (頼朝時代ニ諸國ニオイタル職デアツテ其地方ヲマモル役)

鳴子(なるこ) (田畑ニクル鳥ヲ驚カシ逐フタメ板) 唐木(からぎ) (カラ)

祝詞(しゆご) (しゆくしと讀ム時ハ神ニツグ申スコトバノ) 祝詞(しゆご) (りくとヨム時ハ神ニツグ申スコトバノ)

第十課

一、1. 東風(とうふう) 主(しゅ)

梅ヨ、春ガ來タナラ、アルシ(道真ナサス)ガ居ラズトモ、花ヲ咲ケ、ソシテ春吹タ所ノ東風ニヨツテ、花ノニホヒナハルカ西方ニ居ル我ニ送リユセ。

2. 五日ニ一度風ガ吹キ、十日ニ一度雨ガフルハ、氣候ノ順

チエタルモノデ太平無事ノ世ノ有様デアル。

3. 去年(こぞ) 清涼(せいりやう) 侍(わかし) 秋思(あきし) 詩篇(しへん) 恩賜(おんみ)

御衣(ごい) 餘香(よか)

去年ノ今夜ハ、清涼殿ノ宴ニ侍ツテ、多クノ人々ト秋ノ思ヒチノベタ詩ヲ作ツテ、天皇ノ御ホメニアツカツテ御召物ヲモイタダイタノニ、今日此様ニ筑紫ノハテニ流サレテ居ルノデ、其時ノ詩ヲ思ヒ出シテ腸モナギレ

第三編 第一編ノ答解

一六五

ルクラキカナシイ、シカシ其時ノ恩賜ノ御召物ハユ、マデ持テ來テ、毎日サ、ゲテ天皇ノ餘香ヲ拜ミ、君恩ノアリガダイナ思フ。

二

いどう。(イナガ)

しんにん。(信じて事) ざいさん。(ダイ)

しはい。(ウケモツ事)

べう。(帝王諸臣ノ死ンダタ)

びんかつ。(ハヤクカツ)

はいがふ。(クミア) さばく。(スナ)

けんぜん。(ウヅ)

さうだん。(互ニミコミ)

三、1.

清流。朱塗。

橋。

美觀。

神橋。

結構。

岩ニアタツテクダケル清キ流レ水ガ、雪ノ如ク白クトビ、玉ノ如ク美クトヅ、其流ノ上ニカ、ツテ居ル朱塗ノ橋ノウツクシサ、先ヅ人ノ目ヲ驚カス、之レガ即チ名高イ神橋デアツテ、日光ノウツクシイコトハユ、カラ始マル。

2. 丹青。

金銀ノ光ヤ、イロドツタ色ハ、目モマバユイホドニキレイデアル。

3. 更に。 勝れ。

天然ノウツクシサハ別ダンニ人工ノ美シサヨリモスグレテキル。

4. 直下。

壯觀。

名狀。

マスグニオナルコトガ、七十丈デ其盛ナルサマハ口デアヘヌ。

四、

第。弟。

矢。

失。

思。

恩。

具。

具。道具

技。枝。

使。

便。びん

姓。姓名

性。性質

炭。

岩。

拾。

捨。

樂。

藥。

第十一課

一、りやうど。(一國ノ領シテ居ル土地)

ちよくけい。(タシワ)

にくがん。(眼鏡ナドヲ使ハズ常ノ目ヲ見ルコト)

ほあんりん。(法律ニテソコノ樹木ヲ一時ニキル事ヲ止メホゴセラレテ居ル山森)

だるん。(圓形ニシテツレノ長キ形、小判形) たんえふ。(ナミノ葉ノコトニテ葉ノ一枚ノモノ)

ふくえふ。(一枚ノ葉ガ數枚ノ小サイ葉ニ分カレテ居ルモノ) えふみやく。(葉ノ)

よは。(ヨルノコト)

二、

びは。よど。

ほふりうじ。

ばせを。

のこぎ

り。はす。

あみ。

とがる。

たきぎ。

かいめん。

三、

一、潔く。白扇。

倒。

稱す。

年中雪ヲノセテ居テキヨク、其形ハ白イ扇ヲサカシマニカケタヤウデ、美シイユトハ我が國第一ノ山トイウテヨロシク、イツソ世界第一ノ名高イ山トイツテヨイ

夜半

2. 森林。

暴風。

飛散。

森林ハヨクアラ風ヲサ、ヘ、其力ヲハブキヘラスカラ、土砂ノトビナルノヲフセギ、又イツモ土地ヲシメラシテ、土砂ヲ落付カシム。

3. 我ハ白雲ヲエリクビニマキツケテ、山ノ上デ空中ニ高

ク立ツテ居ツタ。

4. 霞。

我ハ、霞ガユモツテ居ル深イ山カライカダ(木ヲ丸木ノマ、ツナギ川ヲ流シ下ス)

トナツテ都ニキタ。

5. 五百重。故里。

我ハ友ニハナレテヒトリズツト多クノ海路ヲユエテキタ、ア、生ヒ立ナシ故里ガナツカシイ。

四、1. 總べて魚類は暗き處を喜び森林の影さす水中には多

汽車オモ油ニアラ

模オナリオニアラズ

2. 汽車がこのとんねるを通過するに五分間を費す。
3. 奈良の大佛は日本第一の大いなる佛像なり。
4. 曲線は直線よりもやはらかなる感覺を與ふ。
5. 品行方正職務に忠實にして他の模範となる。

第十二課

- 一、ひのき。 かは(なめし) また。 いんさつ、  
くわいぐわ。 かうろほう。 かんし。 がし。  
ねる。 くづる。

- 二、1. オマへハヨク此書物ヲ學ンダナラバ、シマヒニハ帝王ノ師トナルデア、ラウ。  
2. 無頼。 罵る。  
ブラツキノ少年ガ、口々ニヤカマシクイフタ。

3. 張良オウリョウ。 謀ハカ。 韓信カンシン。 高祖オウソ。

張良ハ内ニ居テ謀ヲメグラシ、韓信ハ外ニ出テ軍ヲサシヅシテ、遂ニ高祖ガ帝王トナル大事業ヲナサシメタ。  
4. 無禮ムレイ。 笑罵オウバ。 所以ソノ。

張良ハ老人ノ無禮ヲトガメズ、韓信ハ少年ノ笑ヒアザケルヲ怒ラズ、皆其始ニ小サイ事ヲユラヘタノハ、後ニ大キナ事ヲナシトグルニ至ツタワケデアル。

- 三、あいどく(デヨム)。 さいがく(オ能ト)。 忍とく(ンガテ)  
もくさう(目ツキ)。 わかんのがく(日本支那)  
ぶつかく(佛ヲ祭ル所)。 してい(サシメシ)。 ひとしほ(一ダンヒ)  
はり(柱ノ上ニ棟トウチチガヒニ)。 むなぎ(屋根ノ最高キ所)  
けた(家ノ外マワリノ柱ノ上ニワタス木)。

譽、舉、與

四、地圖、戰爭、活版印刷所、靴、名譽、諺

報知、極上品、附添人、建築、

第十三課

一、五穀ゴコク 餓死ガシ。

五穀が出来ヌ年デモ、國中一人ノウエジニスルモノガ  
ナイヤウニナツタ。

2. 防備ボウビ 稱へ。

我ハアチラノフセギソナヘノ十分ナユトヲホメ、アチ  
ラハ我ガ軍人ノ武勇ナユトヲホメタ。

3. 機械キカイ 工夫クフ 失敗シバ 赤貧セキヒン 洗ふス。

機械ヲ作ル事ニ考ヘチユラシタガ爲ニ、シクジツタ上  
ニ又シクジツテ、一時ハゴクビンバフニナツタ。

4. 厚恩カウオン。

アツキ恩ハドウシテ忘レラレヤウカ、決シテ忘レラレ

5. 泣ナクき。 一座イツ 袖スベ。

義仲ハナミダヲ流シテ泣イタカラ、其座ニ居ツタモノ  
皆泣イタ。

二、 ぎんなん。 かんぎく。 はんのき。 かんしよ。

はなむしろ。 きりかぶ。 しもばしら。 いも。

いす。 む。

三、 隣國、 果實、 幕府、 保證、 談話、 禮儀、

齒磨粉、 疊表、 模様、 順番、

四、 げんさんち(サントノ) とらい(ワタリ) ししよく(タメシニ)

じんりよく(カスラツ) けつか(ナリノ) ちよざう(タクハ)

はいふ(ルクバ) かうあん(ガシ) あくしゆ(手ヲニギル)  
(西洋ノ禮式)

第十四課

磨、 摩 む

一、

潔けつ 侍じ 扇せん 費ひ 過か 眼がん 辛しん 務む  
 熱ねつ 張ちやう 練れん 罵ば 髮はつ 活かつ 限げん 刷す 極ごく 卷まき 指しゆ

二、

戰鬪 輸出 適當 勞働 號令 検査  
 發名 供給 故障 清潔

三、

てうわ(ヒトナ) げざん(げんざん) ぐせもの(ワノ)  
 かんかく(ノゴトヲ感ジ知ルコト) むげん(ナシ) きよくせ  
 ん(マカツ) はんろ(ウレミチウ) ちゆうもく(ケル) けら  
 い(家ニ仕ヘ) かうよう(ハタ)  
 イソザキミンギ。カラクサモヤウ。 ブダウ。  
 ナウ。 ランマ。 ヴルハシ。 ダイダイ。  
 ナナメ。 カキ。 ラツバ。

四、

第十五課

一、

せかいいうすう(世界テ重立チタル) えいさう(兵營ノ中ニアルロウヤ)  
 しうみつ(ヨク行キワタツテ) はれつ(ヤブレ) きりつ(キマ)  
 せうとう(アカリ) きしやう(ネドコヨ)  
 しゆほ(兵營内ナドニテ日用品) てんこ(一々ヨビ集メ人)  
(飲食物ヲ賣ツテ居ル所) (アラガネノヨシ)

二、

1. 風光ふうくわう 麗れいはし。 神氣しんき 覺かくゆ。  
 グルリノケシキガウツクシク、心モナガ自然ニサツバ  
 リトスルヤウニ思フ。

2.

健全けんぜん 精神せいしん  
 シヤウブナ精神ハシヤウブナカラダニアル。

3.

雲霞うんか  
 セメヨセクルタクサンノ敵兵ノタメニ行ク先モワカ  
 ラズニオニゲナサレタ。

4. 老樹（オウジュ） 尙（ナ） 小暗し（コカゲ）。

4. 神鹿（シムカ） 古イ木ガミナチサシハサンデ晝モヤハリクライ。

神鹿（シムカ）神苑ニカウテアル鹿ガ三ツ四ツツ、ツレテ人ニ近ヅイテキテタベモノヲ求メルノモ愛ラシイ。

三、モリ。口。カラカミ。トビ。ヒエ。

トシニク（ブダニク）。ヤギ。ミササギ。トウロウ。ホゲイ。

四、喇叭（ラッパ）の合圖。嵐。病人の看護。

血を肺臓に送る。撃劍（ウツリケン）のけいこ。羽織（ウヅリ）を着る。

脳は目耳鼻口から色々の報告をうける。講話會（カクワ）に出席す。

着（キ）著

第十六課

一、ひめいのこゑ（カナシメ）。

はんえい（シダク）。

ふんしゆつ（ダスキ）。

しやうがい（キツツキ）。

きやうけん（ツヨク）。

しうき（ニホヒ）。

せい（サカリ）。

ふくざつ（イリ）。

きやうけん（ツヨク）。

ざいれう（モノヲコシ）。

二、1. 今空（イマソラ）ヲフリアフギテツツトナガメルト、見ユルアノ月ハ故里ノ三笠山ニ出タ月デアルワイ。

2. 九重ハ宮中ノユト。

3. 人ノ心ハカハツタカ、カハラヌカ知ラヌガ、イツモ來ル所ノ梅ノ花ハ自分ガ來レバイツモカハラズ、昔ノ通りノニホヒヲシテ咲イテ居ル（故里ハユ、ニテハカリニヤドル所）。

4. 多武峰ニキテ見ルト、ユ、モ櫻ノ花ガ咲イテ居ル、サレ



バユ、ハ花ノ名所デアアル吉野ト初瀬トノ花ノ中宿デアアルカナ。

三、参考品。 縣廳。 裁判所。 博物館。

觀覽者。 楕圓形。 繪畫。 餓死。

溫順。 性質。

四、傳。 渡。 盡。 試。 麗。 墓。 望。

消。 握。 貧。 破。 罪。 營。 覺。 臨。 現。 爭。

第十七課

一、皇室。 御威徳。 仰ぐ。

ユ、ニ參ルモノハ、誰デモ其時ノユトナ思ヒ出シテ、皇室ノ御威光アル徳ナウヤマハヌモノハナイ。

2. 結構。 頗る。 眺望。

3. 繁茂。 翠綠。 カマヘガタイヘン大キク、ナガメガ甚ダヨロシイ。

4. 粹。 集め。 此山ハ古イ木ガシゲツテ、ミドリガシタタル様デアアル。

我が國ノ古イ美術ハ、コ、ニ其ヨイトコロチ集メタトイウテヨロシイ。

二、 あんざいしよ。(天子ノミユキセラ) くご。(天子ノ御食事)

ぎし。(技術ヲ職トシテタル役) じゆくかう。(ヨクカン)

かうちせいり。(耕作地ヲトナヘヨクスト) せんもんか。(専ラ一ツノ事ヲヨクシラベタ人)

りんせき。(ソノ席ヘ出ル) けまり。(革ニテ作レルマリヲクツニテケ上グル遊技)

はんばい。(ルウ) せつぶん。(立春日前後)

三、 ボタン。 イハレ。 オホミワジンジャ。

タフノミネ。 カシハラ。 アスカノアング井ン。

規模 模範

四

ウネビ。 カサギヤマ。 カスガジンシヤ。  
 ユンリフ。 ハセノクワンオン。  
 置筋積 堅巡號 胸換逃 裂預姉 珍競 豚昔 雞乳 霞圍

第十八課

一

くわうけい。(アマリ) さうれい。(バリツ) わうせき。(シムカ)  
 きぼ。(ミシグ) ベつり。(ハナル) せんと。(都ヲウ)

ひやくくわまんかいのこう。(タクサンノ花ノマサカリノ時節)  
 ほうぎよ。(天子ノオカク) あんぐう。(天子ノ都ノ外ニ御出)

二

維持。 家畜。 自動車。 艦隊。 傳達。  
 水雷艇。 蜜蜂。 普通。 熟練。 車夫。

三

ミクマリジンシヤ。 フモト。 タル。 ギクギ。

四

オキ。 クワイケイザン。 マウセン。 ダンノウ  
 ラ。 イツクシマ。 シヤクドウ。  
 一、天ガ下ニ雨ガ下チカケ、笠トイフヨリサシテ行クトア  
 ルノデアアル。

二、京都チ出テ、吉野ノ山ノ花ノ下ニ野宿シテ居ル上ハ、タ  
 トヒ吉水ノ行宮ノ端近ク枕ノモトニ、石ノ上チ走ル水  
 音チ聞クモイトフ所テハナイ。

第十九課

一

一、營々。 寸時。

二 蜜蜂。 群集生活。 共同團結。 勞働。  
 アチラコチラト、アルキツメテ少シモ休マヌ。

ミツバチノムラガリ集リテ生活チスルコトノデキル  
 ノハ、一シヨニクンデ、ホネチリハタラクコトチキラハ

(2) 京都ノ別出景  
 コノ花ノ水院  
 色ノ吉水院  
 野ノ起居シテ  
 キテモ、ツテ  
 イ椽先ノ石  
 ノ上ル水流音  
 テラキツト苦  
 ヲナツテチ  
 (常ニ) 賊兵  
 ガ窺カテ  
 ルカテ

ズ、勢力アル武器ヲソナヘテ敵軍ニアタリ、ク、ミノタメニ命ヲナシマヌカラデアル。

3 一天萬乘。 遷す。 無道。 極み。

一天トハ一天下即チ天下ヲ治メ給フ事ナイフ、萬乗ハ兵車ノ數ニテ支那ニハ天子ノ國ハ兵車萬乗ヲ出ストイフトユロカライフタノデ天子ノ尊キユトナイフノデアル、無道ハ人タルノ道ヲ失ヘルユト。

4 志士。 仁人。

志士ハ國ノ爲メニツクス志ノアル人、仁人ハ徳ノアル人、志士仁人ハ生活ノ路ハ求ムルケレドモソレガタメ仁(人間ノ道)ヲソユナフユトハナイ。

5、義トハ行ヒノヨロシキニ合フユトデアアル。

ニ、 しゃう。(シカヒヤ) てきし。(ミルキト) えいり。(スルドク)

ばうぎよ。(グフセ) きこうふじゆん。(氣候ガ常)

けいご。(非常ヲイマシメカ) ふうぶん。(サツ) しゆじやう。(天子)

りんかう。(天子ノ其場ニ御) じやうぶん。(天子ノ聞キ知)

カサ、ギ。 オホドリ。 キジ。 カモメ。 ウヅラ。

サギ。 ナドリ。 ヒバリ。 マナヅル。

カリガネ。(ガン)

四、 完全、 教育、 紅葉の錦を織る、

汽船の通行絶えず、 構造、 空中飛行器、

巡洋艦、 艦を揃へて船を漕ぐ、

第二十課

一、 しょぞん。(カンガヘ) せんさばんべつ。(イロクニ)

びんそく。(サトク) こくうんのはつてん。(國ノ運命ノヒロ)

いうせい。(テ居ルコト) げきちん。(ツメル) ほくわく。(トラヘ)

錦||綿 絶えず

せんきやく。(船底ノ水中) せんかう。(水中ヲカ) せうば。

(ワラヒヤカマシクイフ)

二、吉野山ノユトハ歌集ナドニ其花ヲヨミタル者多ケレド一層人ノ心ヲ動カシ悲シク感ズルハ軍書(太平記)ナドデアアル

2、あづさ弓ハいるノ枕詞、いるハ射ルト入ルトノ二ツノ意デアアル、此度ノ戦ニ出ルニツイテハ、生キテ再ビユ、ニ歸ルマイト、前ヨリ覺悟スルカラ、ユ、ニ亡キ人ノ數ニ入ル(死ヌ)人ノ名ヲカキトドメオク。

3、始メテ吉野山ノ櫻ノ花ヲ見タ時、ソノ美シサニ驚イタトユロサノベタノデアアル。

4、勾踐。空しう。范蠡。

天ヨ、勾踐ヲステ給フナ、ヤガテ范蠡ガ起ラマイモノデ

モナイ、即チ支那ノ越王、勾踐ノ故事ヲ引イテ、ヤガテ忠臣ガ起テ必ズ主上ノ御心ヲ安ンジ奉ルトノ意ヲノベタノデアアル。

陸月(一月) 卯月(五月) 文月(七月) 葉月(八月) 師走月(十二月)

三、きさらぎ(二月) みなづき(六月) ながつき(九月) うづき(四月) やよひ(三月) きくづき(九月)

しもつき(十一月) かななづき(十月)

四、  
離(ワカ) 廻(マユル) 茂(シゲ) 崩(クズル) 操(ウツル) 眺(ノゾク) 耕(ウツル) 仰(ウツル) 專(マカフ) 飼(カガム) 鋭(トシイ) 致(イダス) 雷(カミナリ) 遷(ウツル) 始(ハジメ) 追(オウゾク) 圖(エサ)

第二十一課

一、げきは。(ウチヤ) けいえい。(トナメイ) せいぜん。(ヨクトトナウ) きうせき。(アトイ) じうくわんてつだう。(タテニツキ) しやくじめ。(サニ間ノモノヲイフ) むじんざう。(トツテモトツ)